

平成24年10月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

10月のNHK中央放送番組審議会は、15日（月）、NHK放送センターにおいて、13人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（24年度第2四半期・7～9月）について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、11月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	青柳 正規（国立西洋美術館館長）
	大軒 由敬（朝日新聞社常勤顧問（論説担当））
	小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説委員長）
	紫 舟（書家）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	田中ウヰェ京（（株）MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	和田 章（社団法人日本建築学会会長）

（主な発言）

<経営計画における「達成状況の評価・管理」

（24年度第2四半期・7～9月）について>

（NHK側）

第2四半期の各波の状況について、総合テレビは編集方針にある基本的な使命、国民生活に必要なニュース、情報番組、震災後の日本の課題を考える番組などに対しては特に質的な側面で評価を得ていると考えている。放送10指標の「1. 丁寧に取材・制作されている」、「2. 正確な情報を迅速に伝えている」、「4. 社会的な課題について考えさせられ

る」については10点満点で7点台という評価が維持されている。報道、解説、教養、福祉、科学、自然、大型企画などの番組が貢献しているものとする。総合テレビの接触者率を男女年層別に分析すると、40代男性のリーチについては第1四半期同様に伸び悩んでいる。世代を越えて見ていただく番組の充実についてはまだ課題が残っていると考えている。来年度に向けても分析、検討しているところだ。

Eテレは「1. 丁寧に取材・制作されている」、「2. 正確な情報を迅速に伝えている」については評価を維持しているので、基本的にはよい傾向だと思う。長期的に見ると第1四半期で指摘した4～19歳の男性、40代、60代の接触者率が回復していないので、引き続き対策、検討が必要だと考えている。

BS1については「2. 正確な情報を迅速に伝えている」が評価を維持していて、接触者率も上がっている。報道、解説、スポーツがそれぞれ貢献していて、よい傾向だと認識している。

BSプレミアムは第1四半期同様に全体に質的評価が高く、バランスよい評価になっている。このことは“本物志向の教養・娯楽チャンネル”として視聴者の支持を得ていると考えている。接触者率も順調に伸びているので、BSプレミアムについては引き続きこの方向を維持して放送を続けてよいと分析結果を受け止めている。

7～9月の放送番組を思い起こしていただき、ご意見をいただきたい。

○ NHKの自己評価のしかたを確認したい。

(NHK側)

評価のしかたはいろいろある。世帯視聴率をはじめ、数値としては出ない視聴者からの電話、メール、マスコミでの取り上げられ方、そして今年から番組ごとのアンケートをかなり細かく取るようにし、量だけではなく質を大きく考えて評価をしようとしている。

評価の体制は、分析を行っている現場からの分析結果を聞き、評価を各関係先に報告し、さらに分析を行い、対応策を

考える形で行っている。

(NHK側)

放送の質は、10項目・10点満点で視聴者の皆さんに評価していただく。絶対的な点数と時系列的な面で上がっているのか、下がっているのかを見ることになる。分析を行うチームがいて、例えば総合テレビで点数が上がったものは何が影響しているのかの相関関係などを見ている。その中で、この番組はある項目の点数を上げるのに効果があった、というようなことが見えてくる。それらをまとめたのが、さきほど石田総局長から報告した各波の状況についての分析結果だった。最終的には、自己分析と視聴者の皆さんからの評価を合わせて自己評価としている。

- モニター報告とか、視聴者の声とかいろいろあるが、新しく始められたかなり計数的、可視的なデータ、モニターや視聴者の声など、データがたくさんあるので、NHKの中で組織的にどう議論しているのか。

(NHK側)

波でくくっているが、実際には個別番組ごとにそれぞれ評価を行っている。3か年の基本方針の達成状況を測る経営の14指標における「①公平・公正」、放送10指標の「9. わくわく・ドキドキする」、接触者率など、番組ごとにデータが全部ある。それぞれ上がったものが波全体ではどう影響しているかを分析している。先ほど説明した、番組の影響については、そういうバックデータがあって、個々の番組が伸びているので全体を押し上げていると推計されるという仕組みだ。個々の番組の担当者は自分の番組、個別の番組がどう評価されているかを見て、今後の番組作りに生かしていくことにつながる。

- 組織的な体制で評価委員会とか、NHKの中の評価グループがあるわけではないが、いろいろなデータをもとに経営陣が総合的な判断をしているという理解でよいか。

(NHK側)

放送についてはデータを編成局で分析し、それをそれぞれ

れの放送の担当者が分析する。経営の14指標は放送だけでなく、経営のあり方、営業、技術のことも全部入っている。14指標の結果が出たところで、指標が動いて期待度、実現度が上がっているかどうかも含め、技術も営業も管理部門も役員レベルで議論している。四半期で、経営計画に掲げた目標が順調に実行されているのかや、例えば期待度が下がった場合や、期待度と実現度の差が広がっていれば、どういふところに問題があるのかなどについて、加えて指標には営業の支払率や、受信料としていくら払ってよいかと考えられているかという数値など、これまで使っている指標も含め、総合的に経営のあり方を検討していく。

(NHK側)

14指標については視聴者の皆さんからの評価、数値をもとに分析し、それを担当役員、役員会を経て、最終的には整理したものを経営委員会に報告し、トータルとしての評価を行っている。その14指標の中には、放送に関連する指標もある。その意味で、番組・放送についての評価は2段階で見ることができると言える。すなわち、放送の質的10項目の点数による評価と14指標の中の期待度と実現度という形で評価してもらおう。また、それをふまえたPDCAの中で、NHKらしさは視聴率だけでなく、視聴率が低くても質の高いものについては評価をするという仕組みにしていきたい。

(NHK側)

分析は編成局で行っている。バックデータは全部同じものだ。10指標と各番組の調査と合わせた調査結果を見て、放送を出した側の受け止めとして、われわれが責任をもって番組編成を行っている。これはあくまでも自己評価なので、中央審議の場でもう一度、委員の皆様新しい別の視点での意見をお聞きしたい。

- 委員の質問の中にはNHK側に何らかの組織的な検討体制があれば、いろいろな調査と番組審議会が出た意見そのものについても番組にうまく反映させるチャンネルができるのではないかと、そういうサゼスションが含まれていると思う。一考してもらいたい。

- グラフでは経営計画の4つの重点目標で分類した「公共」の4項目、「信頼」の6項目がなかなか高くてよいと思う。「改革・活力」の期待度と実現度の隔離が大きいこととパーセンテージ自体も低いところが課題だ。放送に関しては公共性を認められ、信頼性も認められている、それが「⑭受信料の公平負担」の認識や、「⑬受信料制度の理解促進」にまで至っていないということになる。これがいちばん大きい問題だ。よく日本の企業はよいものさえ作れば売れなくてもよいという姿勢だと言われるが、同じ結果がこのグラフに出ている。そういう意味では、自己評価を番組改善につなげ、どう迫力をもたせて、「改革・活力」にもっていくのかということが大事ではないか。

(NHK側)

「⑬受信料制度の理解促進」と「⑭受信料の公平負担」は明らかに期待度も実現度も低い。そこに問題があるというのは委員の指摘のとおりだ。この間、都道府県別の受信料の支払い率を公表した。公平負担を実現しなければいけないのに十分にできていない。放送の面で視聴者の期待にこたえる番組を出していくことによって支払率を高めることも重要なことだと認識している。放送がNHKにとっての中核だが、いかに営業の面で経費をかけないで効率的に集めるのかや、公平負担についていろいろな形で視聴者に理解を求めるなど、いまも営業と放送の間でさまざまな連携を行っている。プロジェクト810のように、どういう番組を提供することによって地域の人に貢献できるかなどについて、連携して検討している。放送のできるものと、放送だけではできない営業自身の努力も含め、視聴者総局がイベントなどを行うことと相まって、問題の改善を行っていくことは、経営として必要なことだと考えている。放送は放送として行うこと、各セクションと連携して行うことを会長、各理事が役員会をはじめとする討議の場で連絡を取り合って進めている。委員の指摘にもあるとおり、十分でないことはこういう調査からも明らかだと認識している。

(NHK側)

委員のご指摘のとおり、期待度と実現度をいかに縮めていく

かが課題であり、差が開いているということは経営上努力しないといけない。経営計画全体としても受け止めている。

- 同じメディアに携わる者としての感想として、常にわれわれは送り手発想にならずに受け手がどのように見ているかをチェックし、送り方をそのときどきに合わせて見直していく。それが、メディアの柔軟な対応といえる。基本方針に沿ってサービスをより強化するためにこういうチェックをされていると受け止めた。これだけの放送事業を行っていれば、それなりの評価は得られるであろうという以上の感想はもてない。この2か月はオリンピック、政局、領土問題など、NHKが得意としている分野であり、NHKが取り上げざるをえない分野の放送が多かったので、堅調な評価になるのはある意味当然だと思う。こういう形で放送局が自分たちの放送の中身についてチェックしていくスタンスをNHKは今年から始めたが、BBCなど世界の放送局で似たようなことを行っているところはあるのか。そういうことを参考にしているのか、教えていただきたい。これは始まったばかりだが、放送に反映しなければいけない。今回は比較的评价が高かったので不足分をどうこうすることはないと思うが、もし顕著な指摘があったときにどういう組織的な形で現場に下ろし、放送内容を変えていかれるのかについて聞きたい。

(NHK側)

NHKが導入しているこの評価方法は、世界の公共放送機関で行われている一般的な評価のしかただ。イギリス、フランス、カナダ、オーストラリアも公共放送は同じような形の評価方法を取っている。経営計画では、「信頼される公共放送として、放送機能の強化と放送・サービスのさらなる充実を図り、豊かで安心できる社会の実現と新しい時代の文化の創造に貢献します」という基本方針を最初に掲げているが、国によって文化とか、状況が違うため、重点もかなり違ってくる。NHKは日本の放送局なので災害報道を経営計画でも1番目に掲げている。イギリスでは地震とか、災害のことはほとんど想定されていない。しかし、テロのことは日本と違いずいぶん出てくる。地域性も違う。国によって文化の色合いがあるが、公共放送としてさまざまな指標を使って評価を行い、差で測るなどの方法はかなり共通するところがある。前の経営計画では、接触者率と支払率が中心だったので十分でなかった部分があったため、各国の公共放送がどういう評価を行っているか調査を行い、今回のこのような形を作った。ま

だ不十分なところはあると思うが、世界の公共放送に沿った形の管理評価システムとして今回導入している。

放送に反映していく流れとしては、例えばEテレの場合、40代の視聴がなかなか伸びないなど、Eテレの接触者が全体として落ちているということは経年変化を見ると、接触者率などで出ている。いまそれを踏まえ、25年度の番組改定を進めている。24年度の編成についての評価を説明したが、その評価を引き続き25年度の番組改定にどう生かしていくかにつながっていく。波全体としては、25年度にどのような番組を改定したらよいか、例えば総合テレビでいうと「1. 丁寧に取材・制作されている」と「2. 正確な情報を迅速に伝えている」などはよいが、「10. 感動できる・心に残る」と「9. わくわく・ドキドキする」の評価が低い。ロンドンオリンピックはその項目が高くなっているが、エンターテインメントをはじめ、感動を与える番組が少ないという数的評価から、その辺りにももう少し力を入れていく必要があるのではないかと考えている。

(NHK側)

放送の場合は、番組の編成計画に反映していくということだ。次年度の編成方針については、これまでは現場を中心に行っていたが、それを役員レベルも含め、みんなで議論していくことにした。EテレはNHKしかできないことをどういう形でやっていくのかということを中心に、こういう評価指標も見て整理していく。

- 今日は事柄の性格上かなり経営的な議論が入ってきたが、われわれはあくまで番組をよくするためにという視点で皆さんにご発言をいただいていると受け止めている。経営委員会で異なる意見が出た場合にはわれわれにもフィードバックしてもらいたい。

<放送番組一般について>

- 9月9日(日)のNHKスペシャル「東日本大震災「追跡 復興予算 19兆円」は、たいへんな調査報道だった。その後、この番組をきっかけに政治的にもずいぶん動きがでてきており、たいへんな特ダネだった。ただ、放送後に、この番組が世の中を動かしていると感じさせるようなニュースの扱いが無い気がする。視聴者からすれば、こうした話題はだれが火をつけたのか興味を持つと思う。1回で終わる話でなく、継続的に検証していく必要があることを世論に喚起しなければいけない。さらにニュースで積みかけて追究することをしてよいか。

(NHK側)

解説委員については、NHKスペシャル「対立を克服できるか～領土で揺れる日中・日韓～」でも、第1部に出演していたが、ニュースを伝えるだけでなく、さまざまな番組の中でいかに解説していくか、背景を説明していくか、が求められているので、今後も検討していく。

NHKスペシャル「東日本大震災「追跡 復興予算 19兆円」は、放送後にさまざまな動きをフォローしてニュースで伝えている。10月7日(日)の「日曜討論」に平野復興大臣が出演して、政府側、有識者の意見も聞いた。平野大臣は、「疑問に思うような使い方があるので来年度予算に向けてはしっかり精査していきたい」と発言している。そういうことも含め、ニュース、番組でフォローしている。

- 9月23日(日)のNHKスペシャル「対立を克服できるか～領土で揺れる日中・日韓～」(総合 後 9:00～10:49)では、緊急で作られた番組なのか、第1部の日中関係のパートは、付け足されたような印象で、時間も短く、もったいなかった。その後の「NHKスペシャル」では、よい視点で日中関係が取り上げられているので、長期的な視点が必要だ。また、マスコミは中国から撤退した企業ばかりを追いかけて取材しているという声を聞く。現地の企業は、実際にみんな頑張っており、襲撃された店舗や企業も頑張っている。一部の撤退した企業だけを探すのではなく、平常に動いている企業もきちんと取り上げることが重要ではないか。第2部の日韓問題については、テーマは領土をめぐる問題のはずなのに、この時期、このタイミングで従軍慰安婦の問題を取り上げる必要があったのか。日本国内の有識者だけの討論番組であれば、その点を大いに議論したほうがよいと思うが、韓国から有識者を呼び、これからの日韓関係をどのように発展させていくかを議論する企画であったとすると、事実があったかどうかという論点に終始し、議論が入口で終わってしまった。この企画は、成功したと思っているのか、率直にお聞きしたい。

(NHK側)

8月に、島根県・竹島へ韓国大統領が突然上陸し、その後、天皇訪韓を巡る発言もあったことから、日本と韓国が険悪な関係になった。双方が理解を深めるための番組を緊急に企画し、韓国から有識者を呼ぶことなどを検討した段階で、今度は尖閣諸島国有化を機に、中国との関係が深刻な政治問題になってきた。こういった状況下では、韓国だけではなく、中国も取り上げるべきだということで構成に加えた。NHKスペシャル「対立を克服できるか～領土で揺れる日中・日韓～」第1部の日中関係のパートが時間切れでもったいなかったというご指摘は、こうした制作の過程によるものであり、これで十分だという認識ではない。

韓国大統領は、竹島に上陸した背景について、従軍慰安婦のことも関係があると、さまざまな場で発言している。番組で日韓関係の討論を行った場合、この論点も絡んでくることをあらかじめ想定した。実際にそれに関する発言もあったが、その論点ばかりが中心にならないよう、三宅民夫アナウンサーが収める形で討論をすすめた。日本、中国、韓国の国民感情が高まっている中、この番組の視聴率が10%を超えたということは、国民の間で日本と韓国、日本と中国の関係はいかにあるべきか、いまの状態がこのままでよいとは思っていない人が多いことを表している。この番組を放送したから問題が解決するといった簡単なものではなく、さまざまな意見はあると思うが、それぞれの言い分を伝える番組を放送したことの意味はあると思う。

- NHKスペシャル「対立を克服できるか～領土で揺れる日中・日韓～」は、刺激的だった。ジャーナリストの櫻井よしこさんを出演させたのはなかなかのもので、興味深く見た。司会の三宅民夫アナウンサーも、こうしたテーマでは進行がなかなか難しかったらと思う。解説委員をもう少し出演させていたらよかったのではないか。「ニュースウオッチ9」などのニュース番組でも、現場の記者やキャップ、ときには部長が解説しているが、もっと解説委員が出演する機会があれば、さらによいのではないか。ほかの番組での解説委員同士の討論を見ていると、解説委員は、詳しく取材や調査をしていて、ひとつの問題を総合的に考えていることがよくわかるので、積極的に活用したらよいのではないか。

- 10月14日(日)から放送しているNHKスペシャル 中国文明の謎 第1集「中華の源流 幻の王朝を追う」は、日中両国が冷静に対処する必要のある時期に、きわめてタイムリーに放送されていると感じた。特に殷(いん)の前の夏(か)の王朝の誕生の謎を解く中で、あらためて中国の歴史、文化の根底、源流を知ることができ、日本人も見ることがあると思った。中井貴一さんのナビゲーションもよく、今後どういうことが解明されるのか、たいへん興味深く、次回も楽しみだ。
- 土曜ドラマスペシャル「負けて、勝つ～戦後を創った男・吉田茂～」(総合 後9:00～10:13)は、主演の渡辺謙さんのすばらしい演技もあって、毎回楽しく見た。日本国憲法とGHQ、マッカーサーとの関係や、生い立ち、その後の共産主義との東西冷戦の始まりにつながる流れ、警察予備隊等の再軍備を強要される中で吉田茂が判断していくところが、よく描かれていた。「戦争に負けて外交で勝つ」という吉田茂のことばをドラマのタイトルとしているが、ストーリー自体はGHQ、アメリカ政府に翻弄され、苦渋の決断をしていく吉田総理の姿を描いているので、果たして外交で本当に勝ったのか、というところは考えさせられた。しかし、そういったことも踏まえた上で、この番組タイトルにしたことを、おもしろく感じた。
- 9月15日(月)のひるブラ「秋サケでにぎわう街～北海道石狩市 石狩本町～」を見た。コメンテーターが画面の小さな出窓から話し、現地のゲストのタレントとNHKのアナウンサーがやりとりをしていたが、女性コメンテーターのことばづかいが気になった。民放ではなく、NHKだから気になるということか、それとも昼間の柔らかな雰囲気の中だったせいなのか、つつこみが強く、空気が切れるような違和感を覚えた。また、現地ではタレントとNHKのアナウンサーはイヤホンをしているので、出窓のコメンテーターとやりとりができてはいるが、その周りには地元の皆さんには、音声は伝わっていないのか、無表情であったり、突然違うときに表情が変わったりと、テレビに映っているものと、私たちが聞くものが違って、タレント同士の掛け合いと地元の皆さんの表情との間に一体感がなかった。地元の皆さんとのやりとりを増やして、出窓のコメンテーターとの掛け合いは、もっと少なくてもよいのではないか。
- 9月17日(月)の、TEAM 最高の自分になれる場所「美容家電の女たち」(総合 後10:00～10:47)は、職場に密着してよく取材されていて評価できる。しかし、いろいろな問題を抱えて番組を見ている人たちも多いので、サクセスストーリーにしてしまうと、かえってリアリティを失う面もある。そのあたりを企画段階でもう少しうまく工夫していれば、もっとよい印象を与えたと思う。

- 10月14日(日)のE TV特集「永山則夫 100時間の告白～封印された精神鑑定の真実～」を見た。虐待など、子どもたちを取り巻く状況が悪くなっている中で、丁寧に作られた番組だった。

- Eテレの「グラン・ジュテ～私が翔んだ日」という、さまざまな世界で活躍している女性を紹介する番組を見た。番組全編にわたって、本人が自分自身のことを語っており、他の出演者や司会者などによるインタビューが全くない構成だったが、かえってそれが、ことばを耳に入りやすくして、頭に入ってきた。周りの出演者がいろいろなことを言って、だれが主役なのかわからなくなる構成の対極だと思う。タレントは特にそうだが、アナウンサーの場合でも、聞き手の主張が強くて、相対的に主役のほうで沈んでしまう番組がある。「グラン・ジュテ」で、ことばがスッと入ってくるのは、余計なものがないからだと思った。番組にもよるが、あまりきょう雑物のない作りの番組も、もっと検討してほしい。

- ふだん数多くの番組を見ている中で、毎週必ず見ているものや、おもしろいと感じたものの半分以上はEテレの番組で、特に若年層向けのものがおもしろい。「Rの法則」、「サイエンスZERO」、「すイエんサー」などは、それぞれの年代に合わせて切り口を変えており、興味を喚起している。たとえば、小さな子どもが誕生日ケーキのろうそくの火を一気に吹き消すにはどうしたらよいかというテーマで、運動後にいったん息を止めると、肺の中では引き続き二酸化炭素が血液中から排出され続けるため、息に含まれる酸素の濃度が下がり、ろうそくの火を吹き消しやすいといった内容があった。「テストの花道」、「オトナへのトビラTV」、「100分de名著」、「さかのぼり日本史」をはじめ、ミニ番組も「Eテレ2355」、「ピタゴラスイッチ」など、本当にすばらしい番組が総合テレビに負けないくらいある。
しかし、Eテレは、総合テレビに比べて、接触者率が半分の数字であるのに対して、世帯視聴率となると10分の1前後になってしまっている。BS1やBSプレミアムと比較すると、接触者率はEテレの方が2倍以上であるにもかかわらず、世帯視聴率はほぼ同じだ。BS1、BSプレミアムは、ブランド戦略がしっかりしていて、意識的に目的の番組を見ようとチャンネルを選ぶ人が多いが、Eテレは目的を持って見てもらい難いということが現状ではないか。これだけアプローチしている人が多くて、よい番組が多いにもかかわらず、定着していないことを考えると、Eテレは与えられた役割がまだ果たせていないように感じる。また、これまでの長い年月、教育テレビという名称で蓄積されてきた一般視聴者のイメージが先行していることも大きい。あらためてEテレのブランドイメージを考え直すべきだと思う。Eテレは教育というイメージを替えたほうがよいのではないか。

(NHK側)

Eテレには、教育テレビの時代から長い歴史の中で培われてきた固有のイメージがある。見ている人は少ないかもしれないが、特定層、例えば子どもや知識を得ようという人に向けて、さまざまな形で工夫しながら、NHKにしかできない番組を放送している。Eテレは総合テレビと同じになる必要はなく、EテレはEテレらしい内容の番組をきちんと放送すべきだと思う。“Eテレ”なのか“教育テレビ”なのかも含め、それぞれのチャンネルの使命をきちんと整理し、その中で量より質、NHKにしかできない必要なものを放送していくのが、この波の役割だと考えている。

- Eテレの番組は素晴らしいと思うが、たとえばBSプレミアムでは、ラグジュアリーなイメージの番組スポットが流れているのに対して、Eテレは末尾に数秒「・・・Eテレ」と文字が出る番組スポットだ。「ピタゴラスイッチ」や「Eテレ2355」のような、Eテレらしい映像を利用して、イメージを変える方法もあるのではないか。
- 教育という名称はアナログ的なので、デジタル放送に切り替わったいま、イメージチェンジができればよいと思う。

(NHK側)

Eテレの番組は視聴者の対象を絞ったものが多い。また、子ども番組といっても、子どもとは0歳から20歳までが対象となるので、番組によって2～3歳向け、小学生向け、中学生向け、高校生向けと、細かくわかれる。そのため、放送番組時刻表では、Eテレだけが「朝の幼児・子どもゾーン」など、対象とするゾーンを設定している。30%の接触者率があるのは、ゾーンごとにさまざまな人たちが番組を見ているからであるが、そのなかで1つの番組だけに絞って見ると、対象が限られているので高い視聴率には結果としてならない。ブランド戦略や質のよい番組制作とともに、さまざまな視聴者の要望にどうこたえることができるかを議論しながら、Eテレでなくてはできない番組づくりを考えていく。Eテレも25年度に向けて議論を行っているところである。

そこを踏まえたうえで、さらに見てもらえる打ち出し方を考えたい。

- 沖縄県の尖閣諸島の国有化に対する中国の激しいデモや、工場の操業休止などの報道があるが、私が9月17日から20日まで中国を訪問したときには、その周辺で反日デモのような動きは見られなかった。テレビ放送の抱える特徴かもしれないが、たとえば野球でも実際に球を持ったり投げたりしている人のほかに、映っていないところで、カバーのために後ろを走っている人たちがいる。テレビを見ている人々の印象と、実際はかなり違うことが多いと感じる。出来事の大変さを伝えることはもちろん大事だが、その一方で、平和的な活動で地道に交流している人たちがいることも報道してほしい。

- オスプレイの報道について、安全保障の視点がないという点から、依然として多角的な取り上げ方になっていない。10月1日(月)正午のニュースでは、この日オスプレイが沖縄に配備され、住民の怖いという声を中心に伝えていた。配備について、沖縄県知事のコメントだけで、米軍、防衛省、専門家のコメントがなく、また社会部の取材だけで、政治部の取材が出ておらず、総合的にニュースを判断していないように感じた。記者解説でも、アナウンサーが安全性について聞き、記者は「防衛省は安全性に問題は無いという見解を示しています。今後については運用のルールが守られるかどうかが焦点です」というコメントで終わっており、夜のニュースでも同じようなトーンだった。オスプレイの事故率は、海兵隊の全航空機の平均よりも低く、導入当初の10万飛行時間の事故率は海兵隊の中で最も低い。データから見ても、危険だという取り上げ方は違うのではないか。オスプレイ配備反対の運動をいたずらにあおっている感じがする。また、なぜオスプレイを配備するかという意義が伝えられていない。CH46に比べ、巡航速度、航続距離が大幅に上回っており、空中給油をすればフィリピン、上海まで飛行できる。つまり、在日米軍の全体の能力を向上させており、ある意味で、これを配備することは日米同盟を強化するうえでのシンボリックな存在だとも言える。その意味では、単に対中戦略だけではないということだ。

尖閣諸島を国有化したことを理由として、中国は日本に経済制裁をすることも含め、攻勢をしかけ始めており、連日、監視船による示威行動も続いている。しかし、軍事的な挑発にまでエスカレートしていないのはなぜか。アメリカ軍の、通常は中東に派遣されているジョン・C・ステニスという空母部隊が、横須賀を事実上の母港とするジョージ・ワシントンの部隊と西太平洋で合流していることを9月20日にアメリカ海軍が明らかにした。この発表は、パネッタ国防長官が訪中し、会談の席上で習近平国家副主席が「尖閣国有化は茶番」だと日本を非難した翌日だった。

8月下旬からは、アメリカからの呼びかけで、グアムで1か月以上にわたって海兵隊と陸上自衛隊の間で日米合同軍事演習が実施され、9月22日にアメリカから報道陣に公開されたという経緯がある。このような動きが、日米同盟の抑止力として中国のけん制になっているという文脈で、オスプレイの沖縄配備をとらえないといけないのではないかと感じる。私が見逃しただけで、解説委員はどこかで解説しているのかもしれないが、少なくともそういう視点が欠けていると感じる。解説委員長の考えを聞きたい。また、県別の受信料の支払い率が、沖縄は42%で全国最低の数字だと聞いている。沖縄寄りの報道をすることで沖縄の視聴率を上げ、受信料の徴収も上げるため、報道をゆがめていることがあるとすれば、そうとう問題だ。

(NHK側)

まず、沖縄の受信料収入と報道姿勢について、委員の疑問のような点で絡んでいることはまったくくない。そこは明確に強く否定する。安全保障問題が重要なことは十分認識しているが、一方で沖縄県民が不安に思っていることも事実だ。その点をしっかり解消していかないと、安全保障体制自体が保てない。橋本内閣のときに普天間基地の返還問題を提起して以来、ずっと日本政府、沖縄住民、アメリカが、それぞれの立場で苦しんで考えてきた問題だ。確かに、オスプレイについて、安全性への懸念ばかりに傾いているのではないかという見方の人もいることは承知している。この問題は、日米安全保障条約や、日米関係、日中関係の重要性も踏まえて報道しており、今後も続けていく。

(NHK側)

沖縄の本土復帰10年を挟んでの5年間、沖縄の基地の現状、CH46を中心とした海兵隊の動きなど、専門家の意見も聞きながら取材をした経験がある。いまの沖縄の問題は、安全保障の側面と沖縄という土地が抱えている独自の状況がある。そのときどきに、どこに問題があるのか、十分にしん酌して伝える必要がある。解説委員には、安全保障、軍事を専門としている者がいる一方、政治的な側面から安全保障、外交を見ている者もいる。それぞれの解説委員が、いちばん適切な形で、その場で解説すべきものを伝えていくことを心がけている。一時的には、住民の感情に軸足を置いていると見えることもあるかもしれないが、われわれはそのときだけ

で、その問題を伝えきったとは考えていない。沖縄の問題については、絶えず安全保障面と住民感情を配慮して伝えていく姿勢に変わりない。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成24年9月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

9月のNHK中央放送番組審議会は、10日(月)、NHK放送センターにおいて、12人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、平成24年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、意見の交換を行った。

続いて、ロンドンオリンピックとメディア利用について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、10月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	青柳 正規（国立西洋美術館館長）
	大軒 由敬（朝日新聞社常勤顧問（論説担当））
	小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	田中ウヰェ京（(株)MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（社団法人日本建築学会会長）

（主な発言）

<平成24年度後半期の国内放送番組の編成について>

- 来年度の番組編成についての要望ですが、この夏に8月25日(土)から3週連続で放送していた「ムジカ・ピッコリーノ」（Eテレ 前8:25～8:35）を来年度シリーズ化してほしい。主人公による音楽の実験によって、モンスターが癒やされていくストーリーの中で、名曲が紹介されていた。CGをうまく活用し、美しい映像によって、子どもたちにもわかりやすく、心が躍るような方法で描かれていた。音楽番組の新しい地平を切り開くようなすばらしい番組なので、ぜひ検討してほしい。

- 同じような番組で有名な絵画の中に人が入っていく番組があった。朝の時間に放送されていたが、終了してしまったのか。

(NHK側)

「額縁をくぐって物語の中へ」は、現在、再放送を中心に放送している。

- 「NEWS WEB 24」を、若い人の気持ちが変わるので毎晩見ている。ツイッターが画面に出ているが、コントロールしているのか。何でも出しているのか。

(NHK側)

たいへん多くのツイートが送られてきているので、内容が事実関係と食い違っていないか、ことばとして正しいか、などを確認しながら、画面に表示している。

- 4月に、若い人を取り込みたいということで大幅に編成を変えた結果を知りたい。今のような時期に編成の変更がないようにしないといけないと思う。ふだん、たくさんのNHK番組を見ているが、何曜日の何時ごろにこの番組をやっているということを思いだそうとしても、なかなかよくわからない。民放だと何曜日の何時はドラマとか記憶されるのに、NHKの番組は、なかなか記憶できないのはなぜだろうという点を、真剣に考えるべきではないか。定着しないのはチャンネルが増えたからではなく、ある意味文脈にのっとった編成でないのではないのか。NHKがこれまで培ってきた歴史などに、のっとっていないのか、なぜ定着しないのかと気になる。

(NHK側)

「連続テレビ小説」は半年クールで作っているのも同じ時間だが、番組は変わる。夜10時台は、制作するプロダクションも1年間通じて作りきることが難しい点もあり、去年の秋に放送開始して、ことし春に終了した番組を、あらためてこの秋にスタートするなど、変えているものがある。また、BSはスポーツが多く、夏シーズンと秋シーズンで行われているスポーツも異なり、冬になると行われているスポーツが少なくなるので、その編成は毎年変更せざるを得ない。このような理由で、後半期の改定では、一部の番組が入れ替わっているが根本的に変えたという感じはもっていない。

また、何曜日の何時ごろにこの番組を放送しているという

ことを思い出せない番組は、まだしっかり定着していないのだと思う。「連続テレビ小説」、「大河ドラマ」などは、この時間に放送しているという印象があるのではないか。夜8時台も木曜日を除けば、この曜日は「ためしてガッテン」、「NHK歌謡コンサート」を放送しているなど、定着していると考えている。夜10時台などの番組がいまひとつ印象に残らないということであれば、それは制作、編成でもっと努力しなくてはいけない。

- ラジオ第2の早朝の時間帯、「まいにちイタリア語」は曜日によって都市を巡る「イタリア24の物語」があり、日本語の解説だけでもおもしろい。英語番組はその点で、実用的な印象を受ける。英語番組は役割が細分化されていると思うが、1つぐらい聴いておもしろい番組がこの時間帯にもほしい。

(NHK側)

英語番組は“NHKメソッド”と呼んでいるぐらい、テレビとラジオを合わせて細かいカリキュラムを作っている。その関係もあって一つの番組だけでは、部分的に見えることもある。同じ時間帯に放送するならば、違う味付けをすることもできるかもしれないので、検討する。

- 平成24年度後半期は、あまり前半期と変えずに定着を図る方向でよいと思う。平成25年度になると東日本大震災の風化が懸念される。総合テレビをつければ復興の現状がわかるような時間帯を5分間でも設けるのはどうか。被災地の日常を伝える番組を継続的に流してほしい。いま、スポットでは接することができるが、何曜日の何時にテレビをつけ流れているとわかるほどには定着していない。「NHKスペシャル」や、節目のニュース等では引き続き報じられていくとは思いますが、節目だけでは、そのとき以外に忘れられてしまう懸念があるので、風化を食い止める方法で編成上の工夫がほしい。

火曜日の夜が女性のドラマというのは定着してきたと思う。しかし、二段重ね、三段重ねになってきて、番組間で次はどういうドラマを作るという連携をとらないと、女性3人の同じような物語が続いてしまい、どれがどのドラマか混乱することもある。

(NHK側)

NHKの番組はころころ変わりすぎるのではないかという

ことについて、その問題意識は編成の現場でも持っている。平成25年度の改定も、1回決めたら3年は変えないつもりで臨もうと思っている。3年続けて見るには忍びない番組が出てくる可能性もあり、絶対とは断言できないが、思いとして、ご指摘の課題について十分に認識している。

(NHK側)

東日本大震災プロジェクトを作って、いろいろな番組を放送しており、現在は日曜朝10時を定時枠としている。来年3月11日に3年目に入る。東日本大震災は日本にとって戦後最大の災害で、原発という特殊な問題もある。NHKとしては復興に向け、息長く取り組んでいくというのが、基本的な姿勢だ。

8月にいつも終戦、戦争の番組を編成するのも、その時期にそういう番組を放送することで、忘れないようにしなければいけないという意味を込めている。平成7年の阪神・淡路大震災では節目ごとにニュースのトップ項目で、阪神・淡路大震災を取り上げてきたほか、いろいろなドキュメンタリーやドラマを作って、阪神・淡路大震災からの復興を放送し続けてきた。東日本大震災も息長く取り組んでいく。9月9日(日)にNHKスペシャル「東日本大震災「追跡 復興予算19兆円」で復興マネーがどう使われているか放送したが、次々と課題が出てくる。9月1日(土)のNHKスペシャル「釜石の“奇跡”いのちを守る特別授業」でアニメーションを使うなど、伝え方も工夫していかないといけない。そこは地域局や、放送現場にいる人たちと、何が課題なのかをきちんと伝えていけるように、放送枠も含めて引き続き努力していきたい。

来年3月の東日本大震災から2年のときにもいろいろな放送をする。ご指摘の点についても検討していく。

<ロンドンオリンピックとメディア利用>

(NHK側)

今回のロンドンオリンピックの放送は、前回の北京オリンピックと同じくらいよく見られた。深夜・早朝の生中継や夜間

のハイライト放送などの編成について好評を得た。オリンピックがテレビ向けのコンテンツであることを、あらためて認識した。放送とネットサービスの利用状況については、年代や性別での違いはあまり見られなかった。ネットの活用方法としては、放送予定の確認や競技速報の確認に使われることが多く、テレビ視聴を高める役割を担ったと考える。

- NHKのオリンピック中継はとてもおもしろかったが、解説がほとんど元選手による技術論であり、過去の文明との比較などの視点で評論できる人がほとんど出てきていない。日本はスポーツ評論家もかなり優秀な人がいるので、スポーツとは何か、格闘技、球技、陸上とは何か、そういう解説がもう少しあってよいのではないか。

(NHK側)

スポーツの実況中継に加えて、「NHKスペシャル」など、さまざまな形でスポーツを取り上げた番組を制作しており、番組の性格を考えながら、それぞれの場面に合う解説をしている。実況中継は試合展開が中心となるので、どうしても技術論になる。文明論などまでは踏み込めない。それは別の切り口からスポーツの番組を考え、そこでうまく展開できればと思う。

- 実況の中でそれを解説してほしいと言っているわけではない。全体として実況があつて、再放送があつて、金メダルをいくつ、銀メダルをいくつ、銅メダルをいくつとったとかの結果があつて、当然そこに文明論なども来てよいはずだ。

メダルの数にしても金が少ないとか、銅が多いというのがある。見方によって銅が多いことはすばらしく、スポーツが日本社会の中に緩やかにだが、浸透している象徴で、とてもよいと考えている。それに対してのコメントはほとんどない。NHK全体の編成の問題だ。

(NHK側)

今回のオリンピックは、これまでに比べかなり幅広い種目でメダルを獲得している。その面では、スポーツのすそ野がいろいろな種目に広がったのではないか。あるトレーニングセンターでは、いろいろな種目の選手と一緒に練習をすることで、それぞれのノウハウ、医学的な知識などを共有した成果について、オリンピック終了後に、記者のリポートで紹介している。

(NHK側)

スポーツ中継では確かに経験者が多い。大相撲では、経験者以外の視点でゲストを招くなど、少しずついろいろな試みをしている。オリンピックではNHKスペシャル「ミラクルボディー」で人間の体力や能力の視点から解剖しており、経済系の番組ではオリンピックと経済の問題を取り上げている。今後、東京でのオリンピック開催について話が出てくる可能性もあるので、いろいろな視点で取り組みたい。

- オリンピックはテレビ向けのコンテンツとのNHKの分析だが、ネットがテレビ視聴への誘因となるのがNHKにとって望ましいと考えているのか、オリンピック以外のコンテンツにも広げていきたいのか、あてはまるコンテンツとそうでないコンテンツと見極めて戦略を立てていこうとするのか。放送とネットの関係性の今後の課題になると感じた。

「競技の放送予定の変更がわかりにくかった」という点は、私も視聴者として感じた。「インターネットで番組の放送予定を調べて、テレビを見た」という結果はよく受け止めればネットがテレビ視聴への誘因になっている。逆にテレビそのもので放送予定の情報を十分に出ていないので、ネットで調べざるを得なかったという見方もできる。情報の出し方が的確だったか、反省につなげるべきだ。

- 日韓関係が現在のような状況でも、スポーツや音楽をはじめ、例えば技術交流など、いろいろな形での交流が大事なことだと思うので、政治と無関係に努力している人たちを取り上げてほしい。内戦状態にあるシリアなどでも、ひとりひとりの技術者はみんなよい人で、その人たちが直接戦争を起こしているわけではない。政治的な問題とまったく関係なくみんなできり組んでおり、さまざまな要素で世界が成り立っている。

来年、市民の関心が低ければ東京へのオリンピック招致が不利になる可能性がある。東京にオリンピックが来れば、1964年のときのように日本が元気になるのではないかと。国民がみんなしらけてしまう前に、当時の東京オリンピックの映像などで盛り上がるようにしてほしい。

- どの選手も金メダルを目標にした結果、銅メダルがとれている。たとえば、競泳の場合、日本は強化費が少ないことと体型の差が大きいことがいわれている。競泳であれば身体の差を技と戦略で丁寧に仕上げでぎりぎりメダルをとれるという状況だ。技術と戦略のためによりお金のかけ方をしないといけないと現場は感じている。

実況の中で、競技の歴史、人物や技の背景など、解説者がいろいろな話をすることも大事だが、同時に、スポーツの一瞬の感動を伝えることを優先するべきだ。

国際放送の「SPORTS JAPAN」は、日本のスポーツの良さを伝える番組で、シンクロナイズドスイミングを取り上げた回では、日本の古式泳法を紹介していた。シンクロナイズドスイミングという西洋から伝えられた競技が、日本の歴史も背負っているということも30分近く伝えており、世界に対するアピールになっていた。また、相撲の回では、身体、技術、戦略、心理、哲学というトレーニングの5側面から相撲を見ることができるといふ部分も取り上げており、日本の良さをアピールできる番組だと思った。

ロンドンオリンピックで気になったことは、NHKだけではないが、アナウンサーの「リオデジャネイロでリベンジをしてください」「リオでまたがんばってください」ということばがとても多く、気になった。銀とか、銅だったときに、もちろんそれは応援の意味だと思うが、残念がっている司会者がいた。また、「初出場なのに健闘した」ということばもとても多かった。「リオでがんばってください」は選手にとって金をとれなかったらリベンジしなくてはいけないというのは、たいへんだ。選手たちの厳しいところはどうやって自分の筋肉の寿命に見切りをつけるかがいちばんのストレスだ。だからこそ一瞬にかけている選手のあの輝きが感動になる。リベンジをできないのがオリンピックだ。以前、オリンピックは初出場がほとんどだったが、最近は再出場が当たり前のようになってしまっている。本当のスポーツのすばらしさはリベンジができないことだ。「リオまでがんばってください」と軽々しく言ってほしくない。「初出場なのに」というのも初出場のほうが緊張しないこともある。銅メダルだと残念がる気持ちはわかるが、「ひたむきな努力に感動しました」、「想像できない努力ですけれどもすばらしいと思いました」など、もっと本当のことを言ってよいのではないか。そんな中、8月6日(月)の「ニュースウオッチ9」で室伏広治選手を取り上げていた。アナウンサーが「身を削って精神を極める年月を考えたら、またみたいなことは言えません」とコメントしていた。「身を削って精神を極める」という言葉は説得力があった。

(NHK側)

オリンピックの実況は、NHKと民放のアナウンサーがジャパンコンソーシアムという形をとって放送しており、NHKの放送でも全てがNHKのアナウンサーではない。「身を削って精神を極める」という表現をしたのはNHKの広瀬智美アナウンサーだった。

<放送番組一般について>

- NHKスペシャル 東日本大震災「追跡 復興予算19兆円」はすばらしかった。19兆円のうちの3次補正が9兆2千億円で復興予算の核になるが、その予算項目を全部洗い出し、被災地に直結したもの、全国に波及したもの、関係ないものという形でわかりやすく追跡して、被災地に直接関係あるものはきわめて少ない実態を浮き彫りにしていた。番組の中でも、宮城県気仙沼市の医師が「このような田舎は捨てられていくのではないか」と発言していた。現場の方々からそういう心の気持ちが出る。第1次産業中心の地域なので、住居もさることながら、早く働く場を確保しないと人は残らないし、逃げていくだけだ。

県や市町村が復興計画を作ったものの、その計画はあまり前に進んでおらず、予算とのずれが発生している。がれきは撤去したが、この場所をどうするのか、復興計画はあるけれども実際の中身は合意されていない、予算と連動していないということがある。東日本大震災、原発問題について「NHKスペシャル」でいろいろ特集を組んでいて、すばらしい番組が多いが、復興計画の実態、中身の現状について、今後とも取り上げてほしい。
- 8月25日(土)および26日(日)に2夜連続で放送されたNHKスペシャル「フローゼンプラネット」は、カメラがすごくよくなっていることにととても感心した。アメリカバイソンをオオカミが狩りをするシーンでは、何も解説がなく見ても、もう1回見たくなるような動物の不思議な動きがととてもきれいに撮れていた。
- オリンピックがあったのでいつもより本数は少ないが、8月恒例の戦争を振り返る番組がたいへん充実していた。8月14日(火)のNHKスペシャル「戦場の軍法会議～処刑された日本兵～」(総合 後 10:00～10:49)は、あそこまできちんと報告されるとショッキングというか、弁護する立場からするとたいへんなのではないかと思った。よく調べてできた番組だった。以前から、戦争証言の記録をずっと集めてきた成果を、いろいろなところでまとめて使っていると思う。この夏に限らず、そういう試みが花を開いて、実を結んでいると感じ、たいへんよいと思った。
- 9月1日(土)のNHKスペシャル シリーズ日本新生「“死者32万人”の衝撃 巨大地震から命をどう守るのか」(総合 後 9:00～10:13)では、高知県黒潮町の情報防災課長、静岡県下田市の防災監など、災害発生時に被害が想定される地域の防災担当者と、国土交通省総合政策局総務課長、大学教授で課題を議論していたが、キャスターから、政府には何が足りないのか言ってくださいという感じで担当者に陳情をさせているような印象がした。防災をうまく進められない難しさは山ほど

あって、具体的に検証していけば、それなりに前進すると思うが、現地のレポートが結びつかない形で、スタジオでは話をさせていた。担当者は話すことがうまいわけではないので、国土交通省の総務課長は「そのことについては法律でこういうものをつけさせていただきまして」、というような官僚答弁になってしまっていた。国が理由をつけてお金をあまりつけないのかという印象になってしまい、話が発展していなかった。お金をつければすむという単純な話ではないという点で、少しずれていたのではないか。

以前にも社会保障がテーマで、アナウンサーが「どうして予算をつけてくれないのか」と、当局者に「検討する」と言わせたがっている印象を感じたことがあった。それはアナウンサーの役割ではないのではないか。社会保障については難しい問題が多くあって単に金をつけろという話ではないので、陳情団の代わりみたいなことをするべきでないのではないか。

(NHK側)

NHKスペシャル シリーズ日本新生「“死者32万人”の衝撃 巨大地震から命をどう守るのか」は自治体の防災課長に陳情してもらうためではなく、住民自らができること、自治体ができること、国ができること、それぞれに分けて議論をしたいと考え、そのために国の担当者にも、自治体の担当者にも出演してもらった。ご指摘のような印象を与えたのであればたいへん残念だ。どうしても避難が第一と議論が進んだので、放っておくと自分たちで逃げなさいという話になり、国の果たすべき役割がなかなかうまく表に出てこないこともあって、国にできることはないかと水を向けた。国土交通省の答弁が官僚的との印象については、結果として、こういう政策があるのでうまく利用をしてくださいという説明に終始していたためだと思う。もう少し踏み込めればよかったのだが、生放送で時間の制限もあり、もう一步踏み込めなかったという反省をもっている。

- NHKスペシャル 東日本大震災「追跡 復興予算19兆円」を見て、官庁主導と住民のニーズのギャップ、そしてその実態をどこも精査していない深刻さを感じた。膨大な資料収集による具体的な精査をはじめ、被災地以外の補助金の実態、被災地における配分と選択の実態、それに対する行政担当者の見解を、番組はそれぞれ丹念に取材を試みており、秀逸だ。このテーマへの継続的な企画の検討をしてほしい。

○ オスプレイを巡る報道について、7月23日(月)の「ニュースウオッチ9」は、バランスがとれていない印象だ。その日はオスプレイが米軍岩国基地に到着した日だが、在日米軍がオスプレイを配備する安全保障の観点があまり番組の中で出ていなかった。むしろ、墜落の頻度などの懸念が前面に出た報道だった。岩国の反基地活動家の言い分をずっと聞いていて、最後にキャスターの「国は安全確認をしていますが、国に裏切られたという思いを持つ住民の心に届いていません」というコメントは、情緒的で、問題の本質をあまり伝えていない感じがした。オスプレイがなぜ沖縄に配備されるのか。CH46という輸送ヘリコプターの老朽化があり、米軍は機種の手切り替えで、在日米軍も10月に導入することになっている。CH46と比べ、早さは2倍以上、行動半径も4倍になり、尖閣諸島まで給油せずに1時間弱で人員や物資を運べる性能があり、実際のところ上海、フィリピンまで飛んでいける。日米共同の作戦能力がこれで大きくなるし、日本にとっての抑止力もこれで高まることがある。これは1機が6,000万米ドル、日本円で50億円する高額なものなので、防衛省も予算の関係があってなかなか言いにくい状況がある。こういうことを伝えたいので墜落の危険があるとか、安全の問題について取り上げていくべきだ。翌日に、中国の人民日報系の新聞「環球時報」がオスプレイは尖閣の防衛のために日本が配備していると1面で報じている。オスプレイは80年代ぐらいからの長い開発の歴史があって、当初は“未亡人製造器”と言われたが、その後改良され、米軍が使っている飛行機でも事故率が低いほうになっている。米軍は自分たちが乗るわけだから安全対策を図っているのは当然であり、飛行機は墜落する可能性もあるが、ゼロリスクを求める人たちの意見だけを紹介するのはあまり科学的でない印象だ。

8月7日(火)の正午の「ニュース」はオスプレイに関して各県の知事にアンケートをとっていた。当時はオスプレイの沖縄配備前に、全国でも訓練するという話があり、こういうアンケートをとったのだと思うが、知事には配備に関する権限がない。その意見を紹介する意味が本当にあったのか少し疑問に思う。知事は選挙を控えているし、住民の安全を預かっているのに、ポピュリズムから拒否反応を起こすのはしかたない。それをわざわざニュースに仕立てるのはどうかと感じた。安全保障をポピュリズムでもてあそばないほうがよいと思った。国論を二分する問題は税の問題も増税か減税かというのがあるし、原発も維持か脱原発かというのもある。そのへんもある種通じるものがあると思う。報道ではそういうことも考えていくべきだ。

(NHK側)

オスプレイの件は難しい問題だ。その地域の住民の方々は
“Not In My Backyard”、私の地域には欲

しくないという気持ちが強く出る問題だ。ある意味では初めから結論が決まっているような中で考えていかなければならず、国の安全保障を考える場合は指摘のとおりだと思う。しかし、それを地域の住民の視点から見ると、とても議論が難しい。一方的に国の安全保障にとって必要だからそうですとまでは言いにくく、数多くの取り上げ方をしている。キャスターが番組の最後に「十分な説明が必要なのではないか」と言っているところが、苦しい中での説明のしかたであったと思う。オスプレイの安全性については、正確な情報を流し、住民の方々に配慮したニュースを出していきたい。

- 人気女性グループのメンバー卒業のニュースがNHKで伝えられた。引退ではないし、アイドルグループの目立った人が抜けるだけのことで、なぜNHKがニュースを使って取り上げなければいけないのか、はなはだ疑問だ。ぜひ理由を教えてください。

(NHK側)

人気女性グループの件は、当日の朝の打ち合わせで、イベント会場に入ることができる人の数がきわめて少なく、そうとう混乱する恐れがあり、秋葉原の街も場合によっては事故につながる可能性もあり、ニュースとして取り上げる提案があった。報道しないという選択についても議論をした。ニュースには、ストレートのニュースと企画があり、ストレートのニュースはそういう観点で取材したが、情報系のニュース番組の中には、報道の提案趣旨から逸脱して、グループそのものに踏み込んだ取り上げ方になってしまったかもしれない。放送後に、取り上げないという選択肢についてや、ここまでやるのはどうか、などいろいろな意見が出て、議論になった。

(NHK側)

ニュースは地震、災害、選挙、緊急報道、政治経済、社会を含め重要な事件を扱うが、一方で社会現象も扱う。過去には美空ひばりさんが亡くなったときも、山口百恵さんが引退したときにも伝えた。パンダが生まれたというニュースはどのくらい重要かと問われたことがあるが、それは世の中の人がかかなり関心を持っているのであり、なぜこれだけ熱狂して

いるのか、社会現象になっていることをどのぐらいのボリュームでどういう伝え方をするか考えながら、ニュースの一項目として扱っている。今回の女性グループの件については、日本の社会ということを考える面を取り上げる価値があると思う。扱い方とか、とらえ方はいろいろあって、それはやりすぎなど、意見はいろいろあるとは思っている。ニュースの報道で取り上げることもあるのではないかと。

- それはあると思うが、ニュースで伝える必要があるのか。例えば「クローズアップ現代」などで立体的に分析し、エンターテインメントビジネスの成功にはどういう背景があるのかといった切り口で取り上げる方がよいと思う。今回は、引退や訃報ではないので、その点について、よく考えてほしい。
- 竹島問題に対し、韓国の市民が本当にどのように思っているのかを取り上げてもらいたい。報道だけ見ると憎悪がかき立てられ、隣国であるにもかかわらず難しい状況にこれからも陥ってしまう。ネット上では嫌韓の波が押し寄せていて、ある種のファシズムの到来の土壌を作ってしまうかねない危険性がある。冷静な対話がなされるような韓国側の市民たちの声を出してほしい。韓国大統領が引用した従軍慰安婦問題はずっと引っ張られている話で、どのように言説が外交問題まで発展してしまったのかという点を、引いた目線で見えていくことは日本の外交に寄与するのではないかと思った。

(NHK側)

韓国については、なかなか難しい問題があり、おそらくテレビ局が韓国の国民にカメラを向けたら、その瞬間は反日のことばしか撮れない。日韓友好のために竹島はあまり過激なことをせずに、などの本音はなかなか聞けない。結果的に双方のメディアが報じれば報じるほど双方の愛国心に火をつけるような形で、両方の友好関係にひびが入る恐れがとても強いので、これからも取り扱いには十分に注意をしていく。メディアがあおって、助長するようなことにはならないよう、気をつけなければいけない。文化レベル、草の根レベルの交流は幸い続いているので、さまざまな動きも考慮して取材に当たるようにしている。

(NHK側)

今年は日中国交回復40年にあたるので、9月に「NHKスペシャル」で日中問題を歴史も含め取り上げる。韓国についても冷静に物事をとらえないといけないので、「NHKスペシャル」の枠でそういう観点での番組ができないか、検討している。日韓や、日中の問題については、国民感情も絡むので、扱い方、とらえ方を考え、放送局、マスコミの役割として取り組んでいくべきであり、検討している。

- フォークランド紛争がよいケーススタディになる。同じ領土問題で、小さな島で、お互いに何もなさそうと思っていたが、占領してみたら過剰反応して紛争にまで至ってしまった。うり二つの事例なので参考にするより深まると思う。
- 9月8日(土)からの土曜ドラマスペシャル「負けて、勝つ～戦後を創った男・吉田茂」(総合 後9:00～10:13)は、とてもよい感じで重厚な撮られ方だった。マッカーサーが日本に来たときの実際の映像とCGでうまくつなげてあって、今後期待できると思った。
- 土曜ドラマスペシャル「負けて、勝つ～戦後を創った男・吉田茂」は、放送前に吉田茂を演じている渡辺謙さんが、現代日本の抱える問題点について5分から10分ぐらい語る番組を放送していたが、やりすぎではないか。番宣は番宣に押しとどめてほしい。吉田茂は終戦から戦後日本の土台ができた時代の人物なので、今日を考えるうえでも重要だが、それとドラマを結びつけるのはどうか。広報するのならばもっと違ったことをするべきではないかと思った。脚本を書いた人は、ネットで調べると歴史ドラマを書くような人でなさそうだが、終戦直後の日本をどう解釈するかは今の課題に直結してくるので、なかなか大胆な起用だと思った。脚本家は、どういう方なのかお聞きしたい

(NHK側)

土曜ドラマスペシャル「負けて、勝つ～戦後を創った男・吉田茂」は、放送日以前に、少し長めとなる10分間の「NHKプレマップ」として内容を紹介した。番組について、背景なども含めてPRする枠として活用しているが、ご指摘については受け止めたい。脚本については、40代と若い、実力のある脚本家だ。NHKでは土曜ドラマ「チェイス～国税査察官～」をオリジナル脚本で書いている。今回、脚本家に

は初めて歴史資料と格闘してもらった。時代考証の先生や、いろいろな人がサポートしているので、偏った見方にならないように、ここははっきりとフィクションとしても大丈夫とか確認しながら、十分に気を配って制作している。

- 9月2日(日)のE T V特集「吉田隆子を知っていますか～戦争・音楽・女性～」は、文字どおり忘れられていた音楽家の地道な発掘で、貴重な実演の紹介がされていた。タレントの出演もスタジオトークもない、極めてオーソドックスなドキュメンタリーだったが、こうした番組作りがむしろ新鮮な印象を与えており、解説をいれることが、わかりやすさや視聴者サービスであるというわけではないと感じた。
- 「落語でブッダ～釈迦宗×笑福亭たまの爆笑仏教講座～」(Eテレ 29日(水)30日(木)後11:00～11:25)を見た。落語で仏教を解釈することはとてもおもしろかったが、出演者同士の間をもう少し練ればとてもよい番組になったと思う。中途半端に上滑りしている感じがして、アイデアがもったいないと感じた。どういふ小話をしてもらうかということを考えながら深めてもらうととてもよい切り口が見つかるのではないか。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成24年7月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

7月のNHK中央放送番組審議会は、11日(水)、NHK放送センターにおいて、12人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（24年度第1四半期・4～6月）について石田放送総局長、および、木田放送副総局長から説明があり、意見の交換を行った。

続いて、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、8月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	青柳 正規（国立西洋美術館館長）
	大軒 由敬（朝日新聞社常勤顧問（論説担当））
	小田 尚（読売新聞東京本社専務取締役論説委員長）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説委員長）
	紫 舟（書家）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）

（主な発言）

<放送番組一般について>

- 東日本大震災から1年4か月がたち、東日本大震災に関連する「NHKスペシャル」での取り上げ方を高く評価する。6月2日(土)の「イナサがまた吹く日～風 寄せる集落に生きる～」(総合 後9:00～10:13)は、漁業や農業で暮らしを営んでいる仙台市荒浜地区の人々のドキュメンタリーとして取り上げ、7月7日(土)の東日本大震災「がれき “2000万トン” の衝撃」(総合 後9:00～9:49)は、被災地のがれき処理が進んでいない現状や課題を取り上げるなど、さまざまな切り口で

伝えており、焦点の当て方もすばらしかった。漁業や農業で震災前の暮らしを取り戻したり、がれきを処理しようと被災地の人々が努力している姿は描かれていたが、国や地方自治体の姿が見えてこなかったように感じられた。国や地方自治体は何をやっているのかなど、これからも引き続きいろいろな角度から被災地の実態を取材してほしい。

- NHKスペシャル「宇宙の渚」は第3集まで放送したが、第3集で終わりなのか、まだ続くのかがよくわからなかった。3回シリーズなら“1、2、3”ではなく、“上、中、下”としたり、そのシリーズが終わる回には“完”などの表示をしてほしい。

(NHK側)

NHKスペシャル「宇宙の渚」は第3集で終わりである。

表示のしかたは、今後考えていきたい。

- 番組を“1、2、3…”のように表記しているため、何回シリーズかわからないという意見があった。今までは定曜定時にテレビを視聴していたが、“2夜連続”や“3週連続”といった集中編成が増えており、シリーズの放送のしかたも多様になっている。次回の放送がいつなのかわからず、視聴者に定着しづらくなっている。例えば、番組の末尾に次回の放送日が一目でわかるカレンダーのような表を表示するとよいのではないか。いずれの番組にも表示して、一目でわかるフォーマットに統一すれば、視聴者にも定着すると思う。
- 6月24日(日)、7月1日(日)、8日(日)のNHKスペシャル「知られざる大英博物館」を非常に興味深く見た。7月1日(日)の第2集「古代ギリシャ “白い”文明の真実」(総合 後 9:00~9:58)では、真っ白だと思われていた古代ギリシャ文明の彫刻は、表面をこすりにとって白くしていたという出来事を紹介していたが、大英博物館でそのようなことが行われていたのは非常に興味深いことであり、驚いた。7月8日(日)の第3集「日本 巨大古墳の謎」(総合 後 9:00~9:50)では、日本の古墳からの発掘品が大英博物館に多く収蔵されていることを知って驚いた。大英博物館にはロゼッタ・ストーンなどの有名な展示品があるが、今回の番組で紹介していたように、それ以外にもさまざまな収蔵品があることを知ることができた。ナビゲーターの出番が少なかったことが残念だった。
- NHKスペシャル「知られざる大英博物館」は、NHKの取材力を生かした番組であり、見応えがあった。第3集「日本 巨大古墳の謎」では、巨大古墳を作って

いた古墳時代がなぜ終わったのかという謎について、番組内で一定の答えを出していた。日本の古墳で発掘されたものが、なぜ遠く離れた大英博物館に大量にあるのかと思ったが、イギリスが国家として文化的統治を行ったことで、丁寧にしっかりと保存されていたというプラスの面もあった。日本やギリシャ、エジプトで発掘された、各国の貴重な品々がいまだに大英博物館に収蔵されているという現状や、天皇の墓とされた古墳が現在でも立ち入りが規制されており、発掘や調査ができないことについて、考古学的見地からの問題提起を盛り込めば、番組にさらに奥行きが出たのではないかと感じた。

放送時間が長い番組は、すべてを見るのが難しい場合もあり、番組の冒頭でどのような内容なのかを項目立てて、大筋を紹介してほしい。

(NHK側)

「NHKスペシャル」は、短時間のPR番組を放送しており、番組のポイントなどがわかる内容になっている。「NHKスペシャル」の冒頭でその内容を放送することはないが、この番組をさまざまな時間帯で放送することで「NHKスペシャル」をPRしている。

○ ぜひ「NHKスペシャル」の冒頭でも放送してほしい。

(NHK側)

冒頭で放送してしまうと、番組の本編を見てもらえず、番組としてきちんと伝えたかった部分が視聴者に伝わらない可能性があるので、冒頭では放送していない。

(NHK側)

E P G (電子番組表)には番組内容の情報を載せている。載せる内容をもっと充実させたり、これを読んだら絶対に番組を見たいとなるといったポイントを掲載するなどの工夫をしているところである。

○ 7月4日(水)の「NHKニュース7」では、“ヒッグス粒子とみられる粒子発見”というニュースを伝えていたのはすばらしかった。CERN(ヨーロッパ合同原子核研究機関)による巨大な円型のトンネルを使った壮大な実験や、ヒッグス粒子の存在を唱えた理論の基になった、南部陽一郎さんが提唱した理論などを詳しく紹介しており、NHKの取材力を感じた。新聞はこのニュースを大きく取り上げていた

とは言えず、サイエンスジャーナリズムの弱体化が感じられ、日本の報道の危機的な状況の1つなのではないかと思った。また、サイエンスの分野は費用などの面から1つの国ではなかなか支えきれなくなっており、CERNのようにヨーロッパ各国が資金を出し合って研究に取り組んでいる。今回のニュースやこのようなサイエンスが置かれている状況を取り上げることで、国策として取り組んでいかなければならないという動きや弱体化しているサイエンスジャーナリズムの活性化につなげてほしい。

- 7月7日(土)の地球ドラマチック「めざせ最高峰！アフガニスタン人初の挑戦」は、標高7,492メートルのアフガニスタンの最高峰に、2009(平成21)年にアフガニスタン人として初めて登頂した若者たち取材したドキュメンタリーであり、非常に感動した。アフガニスタンの山岳地帯の圧倒的な自然とその美しさ、アフガニスタン人が登頂に挑んでいく、誇り高く、非常に生き生きとした表情や姿がありのままに捉えられており、メッセージ性が強い番組になっていた。アフガニスタンはタリバンなどの政治的な問題や課題に注目が集まるが、番組を見て“アフガニスタン観”が変わった。そこに生きる人々のありのままの姿、本当の表情を撮ることが、どんな雄弁なことよりも強いメッセージになって、われわれの世界観や自然観を変えることがある。この番組はフランスのテレビ局の制作だが、NHKにもこのようなすばらしい番組を制作してほしい。
- 「平清盛」は毎回楽しく見ている。與那覇潤さんが書いた「中国化する日本」を読んだうえで、「平清盛」を見ると、番組をさらに興味深く見ることができる。近世とは中国の宋の時代から始まったと言われているが、貴族制度を廃し、皇帝独裁の政治が始まった時代でもあり、科挙が行われ、中央集権が始まった。経済や社会が自由になっていく宋の姿を見て、清盛や信西、後白河法皇たちがその方法を学んで改革を進めようとした。日本の中世は武士の時代と言われているが、経済面では宋銭が使われていた。源氏は従来型の農業中心の荘園制社会を維持したいという、いわゆる守旧派として捉えられており、平氏と源氏の違いが源平の戦いに表れている。院政が成立したことも中世の特徴であり、こういったさまざまな視点から番組を見ると、非常に興味深く見ることができる。
- ドラマ10「はつ恋」は、40代の女性を中心に視聴してもらいたいという意図が伝わってくる内容である。同じように「あさイチ」も40代の女性を主な視聴ターゲット層としている内容になっていると感じる。一方で、「土曜ドラマスペシャル」は平成19年放送の「ハゲタカ」のように、働き盛りの男性に共感してもらえるドラマを放送して男性視聴者の定着を図るなど、男性やそれ以外の年代に視聴しても

らうためのねらいも必要だと思う。

- 「総合診療医 ドクターG」、6月16日(土)と23日(土)の「マイケル・サンデル 5000人の白熱教室」(Eテレ 後 2:00~2:59)、「スーパープレゼンテーション」は、いずれも番組を導いていく役割を教育者が担っており、見応えがある。アナウンサーやタレントが番組を進行している番組は、似通ったことばが多く、退屈な印象を受ける。教育者など、自分の心と頭で考える立場の人を番組に起用することは、日本がモデルにできるような国がないと言われる時代をキャッチアップしていると感じる。
- 「100分de名著」は、今年度から司会が代わった。新しい司会は“名著”にしっかりと向き合っており、司会の立場を十分に踏まえて、番組に主体的に関わっているようで、より見たい番組になっている。
- 「ハーバード白熱教室」や「マイケル・サンデル 究極の選択」は、サンデル教授による授業そのものを伝えているという印象だったが、「マイケル・サンデル 5000人の白熱教室」は5,000人という聴衆を集めた講義で、ショーアップされてしまっているように感じられた。
- 7月7日(土)の追跡者 ザ・プロファイラー「ヒトラー 独裁者という名の怪物」(BSプレミアム 後 9:00~9:59)は、ヒトラーが世に出てきたときの状況を考えるとタイムリーな企画であり、興味深く見た。今回の番組は取り上げる内容が多すぎたため、あっという間に終わってしまい、番組尺が短く感じられた。ヒトラーの演説、若い頃やたまたま撮られた笑顔の写真など、一つずつを掘り下げると、出演していた社会学者や精神科医からはもっと多くの意見を聞くことができたのではないかと感じた。もう一度、一つ一つを細かく検証し、当時の時代背景や群衆の心理などを掘り下げることによって、別の角度から描いた番組を作ることができるのではないかと感じた。
- 「コズミック フロント～発見！驚異の大宇宙～」は、宇宙についての知識や関心がない視聴者も興味深く見るように、非常に丁寧に制作している。全編を海外取材して制作している回もあるが、NHKの単独での制作、海外のテレビ局との共同制作など、どのような制作体制なのか。海外と番組を制作する体制を日頃から築いていることが、NHKスペシャル「宇宙の渚」のような大きな取り組みや“ヒッグス粒子とみられる粒子発見”というニュースを伝える際にも役立っていると感じた。

(NHK側)

「コズミック フロント～発見！驚異の大宇宙～」は去年4月から始まった番組である。制作局の科学環境番組部が制作しているが、海外のテレビ局が制作した素材を購入して、独自取材したインタビューを加えて制作する場合もある。

- 6月26日(火)の「衆議院本会議」関連のニュースは、午後1時から4時50分まで、消費税率引き上げ法案の衆議院本会議での投票の様子を中継しており、状況が非常によくわかった。さらに、小沢一郎民主党元代表と野田首相の会見も伝えていた。今回のように漏らさずに中継するために、投票や会見が行われる日時は事前にわかっているのか。

原子力発電所の稼働に反対する集会やデモが行われているが、これに対するNHKの報道の姿勢を知りたい。

(NHK側)

消費税率引き上げ法案の衆議院本会議での採決は、日程が延びて7月26日になった。事前の取材から、民主党の中に反対票を投じる議員や棄権する議員が多数出る可能性があり、今後の政治の動向は民主党分裂などの方向に行く可能性が非常に高いと判断した。その段階で、衆議院本会議が開かれ、消費税率引き上げ法案の投票が行われる際には中継をして、各政党の代表者に直接インタビューすることを計画した。そして、野田首相や小沢元代表の会見が行われる段階できちんと伝えるという対応を取った。今回のほかに平成17年の時のように郵政解散など、政治の大きな節目の際には、長時間にわたって衆議院本会議の様態を中継することが必要だと考えている。

さまざまな場所で行われているデモをすべて取材することは難しいが、今回は原発の事故後、初めて原発を再稼働するということが大きな節目だと考えた。原発の再稼働に反対する人も多くいるので、その点についても伝える必要があると考え、首相官邸前でのデモを「ニュース」で取り上げた。今後も、デモについては毎回伝えるということではなく、節目のときに伝えていく。

原子力発電については、安全性や事故が起こったメカニズムの問題について報道した。エネルギー問題について全般的

に考える番組として、7月14日(土)にNHKスペシャル「激論！ニッポンのエネルギー」を放送する。将来の原発の割合をどのぐらいにするのかについて、政府からはいくつかの案が出ており、8月中には方針を決めるということなので、このタイミングでさまざまな立場の方に出演していただいて、エネルギー問題について考える討論番組に取り組んでいきたい。

- 「衆議院本会議」関連のニュースで、消費税率引き上げ法案など、社会保障と税の一体改革に関連する法案の採決の様子を中継したことは評価できる。消費税率引き上げ法案の投票の際に、民主党の議員で反対票を投じた議員の数が画面に出ていることに感嘆した。画面に表示していた議員数はどのように確認していたのか。

(NHK側)

本会議場の壇上で投票していくので、民主党議員が投票する際に、記者が議員の顔、賛成と反対のどちらに投票したかを確認して投票数も数えていった。また、途中で数え間違いや漏れがあるといけないので、アナウンサーのコメントは「少なくとも何人が反対した」というように、確認できた投票数を伝えるように配慮した。

(NHK側)

放送の現場では、日頃から民主党を取材している記者が議員の顔写真と照らし合わせながら、誰が投票しているかを確認していた。本番では確認できない議員はいなかった。

- 首相官邸前のデモについての報道のしかたは、テレビ局や新聞社など、各社ともに悩んでいるのではないか。今回のデモは自主的に始まり、多くの人々が自主的に続き、量だけではなく、質的にも新しいものが起きている。NHKはなぜこのニュースを報じないのかということが話題になっており、それによって人々の関心を呼んでいるような状況も起きている。報道とはその瞬間をつかまえる感性だと思うので、NHKは数や節目などだけで計画的に動くことがないようにしてほしい。

- 「ニュース」では“リポーター”が出てくるが、番組において、どのような位置づけなのか。

(NHK側)

「ニュースウオッチ9」のリポーターはアナウンサーが務めている。「NHKニュース おはよう日本」のリポーターは契約している外部のキャスターが務めている。記者がリポートする際には、名前と所属している部を紹介している。

(NHK側)

アナウンサーが複数出演する「ニュースウオッチ9」では、井上あさひアナウンサーは“キャスター”という役割で司会をしており、松村正代アナウンサーは“リポーター”という役割で取材を行い、現場にもロケに行っている。同じアナウンサーだが、主にキャスターワークをするアナウンサーとリポーターワークをするアナウンサーが異なるため、役割を意識した表示のしかたをしている。この場合は、1つの仕事の役割という意味で“リポーター”という表示をしている。

- ロンドンオリンピック関連の番組は、どのような番組を予定しているのか。

(NHK側)

ロンドンオリンピックが閉幕する、8月13日(月)の夜に「ロンドンオリンピック総集編」の放送を予定している。そのほか、日本人選手が活躍したり、金メダルを獲得した際には特集番組を放送したいと考えている。

(NHK側)

ロンドンオリンピックは、総合テレビで230時間、BS1で350時間の放送のほか、ネット生中継(ライブストリーミング)、NHKオンデマンド、データ放送など、さまざまな形で楽しんでほしい。

(NHK側)

NHKオンデマンドでは、通常の配信期間を延長して配信する予定である

- 夏の電力需給が厳しくなったときに、電力の状況を伝える以外に、ロンドンオリンピックや高校野球の中継などについてはどのように対応するのか。

(NHK側)

電力の事情や計画停電について伝えることは考えているが、ロンドンオリンピックや高校野球を含めた放送時間の短縮などは考えていない。

(NHK側)

高校野球は、主催者側が試合の実施を電力消費が集中する時間帯から外すなどの対応をしている。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成24年6月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

6月のNHK中央放送番組審議会は、18日（月）、NHK放送センターにおいて、13人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」の試行について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、7月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	青柳 正規（国立西洋美術館館長）
	大軒 由敬（朝日新聞社常勤顧問（論説担当））
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説委員長）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	田中ウヰェ京（(株)MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（社団法人日本建築学会会長）

（主な発言）

<放送番組一般について>

- 5月26日（土）と27日（日）のNHKスペシャル「未解決事件 File.02 オウム真理教」（総合 26日（土）後7:30～8:43、9:00～10:13、27日（日）後9:00～9:58）は、番組を見たことによって、麻原彰晃こと松本智津夫死刑囚や教団の意図は何だったのか、なぜ若い人や研究者などがオウム真理教に走ったのかなど、さらに謎が深まった。27日（日）の「オウムVS警察 知られざる攻防」では、警察のオウム真理教への捜査について、今までにない視点で深く取材していた。一方で、課題も残っていると感じた。

- NHKスペシャル「未解決事件 File. 02 オウム真理教」は非常に力が入っており、実際のニュース映像と再現ドラマを組み合わせた演出は違和感なく見ることができた。しかし、再現ドラマでオウムの教団施設内の信者を描いた映像が、非常に生々しかった。こういった場面を再現ドラマとして描くかは、考慮する必要があると感じた。また、今後もさまざまな未解決事件を取材してほしい。

- 6月2日(土)のNHKスペシャル シリーズ日本新生「“雇用の劣化”を食い止める！」(総合 後 7:30~8:43)は、雇用という非常に難しいテーマを扱った番組であった。新しい働き方などの提言を紹介したうえで、スタジオで討論に参加した人やネットでつながっている人が“賛成”、“異議あり”を判断して、議論していた。しかし、日本社会がこういう世の中になったらよいという提案なのか、自分がそのようになりたいという提案なのか、といった基準を定めていない中で、賛否を聞いて、議論していたために、議論がかみ合っていない部分もあったように感じられた。この番組のねらいが達成できていたのか、疑問に思うところや、議論に参加した人たちもフラストレーションがたまった部分があったと思う。意見を言ってもらってから賛否を問うような進め方や、“4時間正社員”などの具体例をテーマに議論していくと、さらに充実した内容になったのではないか。どのような意見が出るかわからない部分はあるが、視聴者参加番組は言いつばなしで終わってしまう傾向にあるので、一定の結論が出るような仕掛けが必要だと思う。

(NHK側)

視聴者参加の討論番組は、時間的な制約もあり、議論のための議論になってしまうこともあるが、議論を踏まえた具体的な結論や、結論まで至らなくてもいくつかの選択肢の可能性を提起することを試行錯誤しながら目指している。特に雇用や働き方の問題は、日本の雇用の在り方が変わっていくために、放送のつど、問題の提起のしかたも変えている。例えば、番組で取り上げた広島電鉄については、前回の放送で正社員と契約社員の区別をなくすことが組合で大きな議論になっていると紹介したが、今回の放送では、契約社員をすべて正社員にした結果を紹介した。1回の放送で結論が出る問題ではなく、問題をどのように乗り越えているかのプロセスを段階を踏んで伝えていっており、これからも継続して放送することが大事だと考えている。

- 6月2日(土)のNHKスペシャル「イナサがまた吹く日～風寄せる集落に生きる

～」（総合 後 9:00～10:13）は、東日本大震災で津波によって失われてしまった仙台市の荒浜地区の風景を7年前に取材したときの映像と比較して紹介した、心に響く番組だった。ぜひ5年、10年後にも、このような番組を制作してほしい。

- 5月23日(水)の「ニュースウオッチ9」では、大量の新薬が生まれる中で、副作用を招く薬の飲み合わせや薬そのものを取り違える医療ミスを防ぐため、薬剤師が救命救急医療の現場で重要な役割を果たしていることを紹介していた。薬剤師は、医師の処方箋に従って、薬を調剤して窓口で渡してくれる身近な存在というイメージがあるが、救急現場でも重要な存在になっていることを知った。番組で紹介していた救急現場で活躍している薬剤師は印象深く、番組で取り上げることで、薬剤師を志す人の励みになると思う。
- 6月8日(金)の関西電力大飯原子力発電所の再起動に関する「首相記者会見」は、記者会見の中継を途中で打ち切り、スタジオから記者解説を伝えていた。首相の記者会見は最初から最後まで放送すべきではないかと考えるが、どのような判断をしているのか。

(NHK側)

首相の記者会見は、首相が海外に行っている際に行う会見などもあり、すべての会見を中継しているわけではない。また、中継する会見も最後まですべてを伝えるものもあれば、今回のように途中まで伝えるものもある。基本的にはニュースとしての価値で判断している。考え方としては、首相の考えや記者との質疑応答など、その会見の核心部分を伝えたと判断したら、会見の中継を終えている。今回、会見を中継した午後6時台は地域のニュースを伝えている時間帯であるため、会見の主旨を伝えきったと思われた時点で速やかに中継を終えて、地域のニュースに移ったほうがよいと判断した。

- 6月10日(日)の日曜討論スペシャル「どうする“社会保障と消費増税”」は、放送前に与野党協議に入ることを決めていたこともあり、極めて落ち着いた討論だった。このような冷静な討論は政治を前進させるものであり、大変興味深く見ることができた。しかし、視聴者から寄せられた意見を紹介する画面で、青筋を立ててどなったり、汗を垂らしている漫画があったが、番組全体の議論と合っておらず、残念だった。

- 6月15日(金)の情報L I V E ただいま!「心臓がよみがえる!? 最新!再生医療の衝撃」(総合 後 10:08~10:56)は、6歳未満では初めてとなる脳死判定を受けた男の子の心臓を、10歳未満の女の子に移植する手術を執刀した大阪大学の澤芳樹教授が、手術を執刀した当日に出演しており、非常にタイムリーだった。“空中タイムキーパー”の演出は、番組に親しみを持たせようとしているのかもしれないが、不要ではないか。
- 6月3日(日)のE T V特集「亡命詩人の憂鬱~23年目の天安門事件~」は、ドイツに亡命した後も闘い続け、活動している中国人の詩人がいることを知った。天安門事件で投獄され、今も中国に残っている中国人たちの精かんな顔つきが印象的であり、感銘を受けた。
- E T V特集「亡命詩人の憂鬱~23年目の天安門事件~」は、印象に残る番組だった。
- 「ららら♪クラシック」は、NHK交響楽団以外のオーケストラの演奏も取り上げる番組として始まったが、「N響アワー」と比較してもクラシック音楽番組として満足できる内容になってきていると感じた。6月17日(日)の「小澤征爾 渾(こん)身のコンサート~2012年水戸」は、小澤さんの指揮による、水戸室内管弦楽団のコンサートを取り上げ、「交響曲第35番『ハフナー』」や「チェロ協奏曲第1番ハ長調」を放送していた。非常に質の高い演奏で、ゲストとのスタジオトークも演奏を引き立てる内容になっていた。
- NHK俳句「俳句さく咲く!」は、ゲストの芸人やアイドルが、若者たちから投稿されたエピソードを俳句として完成させる番組であり、先生として宇多喜代子さんがゲストを指導しているが、ゲストからは日本語や俳句への興味が伝わってこないなので、ゲストの人はもう少し考えてほしい。
- 「にっぽんの芸能」は、第1部の「花鳥風月堂」と第2部の「芸能百花繚乱」に分かれている。古典芸能になじみの薄い若い人たちに番組を見てもらいたいという意図で「花鳥風月堂」を放送しているのだと思うが、魅力を感じない。

(NHK側)

日本の古典芸能は若い人になかなか見てももらえないので、「にっぽんの芸能」は去年から、前半の15分を入門編である「花鳥風月堂」、後半の43分はじっくり見てもらう「芸能百花繚乱」という構成に変更した。世帯視聴率に大きな変化

は見られないが、若い人からは、古典芸能についての知らないことがわかり、勉強になったという反響をいただいている。

- 6月10日(日)のBS世界のドキュメンタリー選「ビンラディン追跡の20年～防げなかったテロ攻撃～」(BS1前11:00～11:48、後0:00～0:47)は、さまざまな関係者に深く取材しており、見応えがあった。アメリカ政府の中心人物にもしっかり取材をしていたことに感心した。NHKとBrook Lappingの国際共同制作ということだが、NHKはどのように制作に関わっていたのか。また、共同制作の構造はどのようになっているのか。

(NHK側)

「BS世界のドキュメンタリー」は、既に制作された番組をNHKが購入して放送することが多いが、「ビンラディン追跡の20年～防げなかったテロ攻撃～」については、国際的な関心が非常に高いテーマだったので、NHKも企画の段階から制作に参加した。そのため、日本人の観点や意見も反映した番組になった。また、NHKから海外に呼びかけて共同制作を行うケースもある。

- 1964年に開催された東京オリンピックは、戦争から立ち直ろうとする日本に元気を与えた。2020年に東京オリンピックが開催されれば、東日本大震災から立ち直ろうとする日本に元気を与えると思う。しかし、国民がオリンピックの開催に積極的ではないことが招致に対するマイナス要因となっていると聞いた。NHKは、オリンピック招致についてどのように取り組んでいくのか。

(NHK側)

NHK会長もオリンピック招致委員会評議会の委員に入っている。その中で、連携を取りながら取り組んでいきたいと考えている。

(NHK側)

IOC(国際オリンピック委員会)の調査では、東京都民のオリンピックの開催支持率は半分程度であり、招致に向けた大きなマイナス要素になっていると言われている。こういった点も踏まえて、さまざまな形で招致を盛り上げていきたい。

- 今回の生活保護の不正受給についての一連の報道は遺憾に感じている。生活保護は、必要とする人に十分に行き届いているとは言えず、生活保護制度の構造的な課題やセーフティネットの在り方について、きちんと議論していかなければならないと思う。生活保護の不正受給を非難するような報道だけでなく、生活保護のありようを考え直すきっかけになる番組を作ってほしい。

(NHK側)

生活保護については、去年、NHKスペシャル「生活保護 3兆円の衝撃」を放送した。

- 東電女性社員殺害事件について、再審の開始が決まった。15年前に起こった事件であり、当時の事件の概要を知らない人が増えているので、どのような事件だったのか、なぜ15年にわたってネパール人の元被告が無実の罪で捕まらなければならなかったのか、このような結果を生んでしまった警察や検察の捜査の仕組みはどのようなになっているのかなどに踏み込んだ番組を放送してほしい。

(NHK側)

東電女性社員殺害事件については、再審開始の決定が出た6月7日(金)に、クローズアップ現代「東電女性社員殺害事件 再審の衝撃」を急ぎよ放送して、事件や捜査、裁判の構造について伝えた。

- 放射能に対する注意報を放送でも取り上げるべきではないか。次に大きな地震が起こった際に、放射能に対する警告や風向きによる被害の状況などを知らせるべきではないか。

(NHK側)

地震が起きた際には、原子力発電所が正常に稼働しているか、さまざまな被害が出ていないかなどを直ちに取材している。東京電力福島第一原発の事故では、放射能の影響予測システム“SPEEDI”など、精度が不確かな情報については伝えるのが遅れてしまうことがあった。今回、原子力災害の緊急報道を検証した。今後は、視聴者が求めている重要な情報になりうる場合があると判断したときは、異なる意見や考え方なども情報として取り上げ、その情報の不確実性を含めて、踏み込んで伝えていきたいと考えている。

- 日本の原子炉建屋は1基も免震構造を採用していないが、地震が少ないフランスでは、ITER（国際熱核融合実験炉）を建設する際に免震構造を採用している。原子力発電を継続するのか、やめるのかという議論があるが、継続するなら、恐れるだけではなく、耐震などに真剣に取り組む必要がある。

- 「平成24～26年度NHK経営計画」の3か年の基本方針で、“新しい時代の文化の創造に貢献します”とある。“新しい時代の文化”には、放送におけるブロードキャスティングからコミュニケーションへという移行があり、若者もそれを求めていると思う。ツイッターやフェイスブックなどのソーシャルメディアはコミュニケーションの最たるものであり、これらを活用して、若者を巻き込むような番組を制作してほしい。また、NHKでは、30秒の映像を募集して入選作品を放送で紹介する「ミニミニ映像大賞」という取り組みを行っているが、若者が自分たちの周りにある課題を見つけ、考え、解決策を示すことを映像で募集し、若者とツールを作るという方法もあるのではないか。若い世代にリーチしづらい部分をNHKが先取りすることによって、新しい時代の文化の創造につながると思う。

（NHK側）

NHKスペシャル「宇宙の渚」に関連して、プロモーション動画コンテストを実施した。視聴者にNHKクリエイティブ・ライブラリーにあるNHKアーカイブスの素材を使って、60秒のPR番組を作ってもらい、応募いただいた。およそ150作品の応募があり、NHKネットクラブで人気投票を行ったほか、GyaO!やYouTube、ニコニコ動画にも掲載し、受賞作品は放送でも紹介した。

大河ドラマ「平清盛」では、担当のプロデューサーが番組の解説をツイッター上で放送と同時に行うSNSとの連携に取り組んでいる。NHKの番組を見てもらうために、さまざまなコミュニケーションのツールを試行している。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成24年5月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

5月のNHK中央放送番組審議会は、21日（月）、NHK放送センターにおいて、14人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、国内放送番組の種別の実績、種別ごとの放送時間（23年10月～24年3月）について報告があった。

続いて、仕事ハッケン伝「大島麻衣×羽田空港グランドスタッフ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、6月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	青柳 正規（国立西洋美術館館長）
	潮田 道夫（毎日新聞社論説委員）
	大軒 由敬（朝日新聞社常勤顧問（論説担当））
	小田 尚（読売新聞東京本社取締役論説委員長）
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	田中ウヰヱ京（（株）MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（社団法人日本建築学会会長）

（主な発言）

<国内放送番組の種別の実績、種別ごとの放送時間について

（23年10月～24年3月）>

- 複数の種別を適用している番組が比較的多いチャンネルがある。これだけ複数の種別を適用していれば、種別の調和を保つことができるのは当然のように思われるが、結果としての種別ごとの割合をどのように評価すればよいのか。

(NHK側)

複数の種別を適用している番組は、等分ではなく、番組の内容に応じてそれぞれの種別の比率を決めている。

年ごとや月ごとの推移を見てもらい、前年や前月から大きな変動があれば注目してほしい。

総合テレビの報道番組の割合は平成24年度は48.6%となっている。22年度、23年度は東日本大震災に関連した番組が多かったため、22年度が51.0%、23年度が50.8%と、50%を超えていた。

- 各チャンネルの種別の比率は、ふだん感じている印象と合っていると思う。
- 教育番組は“学校教育または社会教育のための放送番組”と規定しているが、“社会教育”は“生涯教育”という呼び方をしている場合もある。教養番組についても“教養”ということばの捉え方が揺れ動いている。種別についても、時代に即した内容となるよう、随時見直して行ってほしい。
- 今後も審議会では、半年ごとの報告の都度、番組の種別の分類や比率が適切かどうか議論していきたい。

<仕事ハッケン伝「大島麻衣×羽田空港グランドスタッフ」

(総合 4月12日(木)放送) について>

- 楽しめる番組であったが、たった1週間で飛行機1便を送り出す責任者という大きな仕事を成し遂げるのは現実では難しい。指導している先輩たちが、仕事に挑戦しているタレントを近くで助けてくれているということを番組の中でもきちんとフォローしてほしい。
- タレントたちがやってみたかった仕事に本気で挑み、もう一つの人生を体感する番組という触れ込みだが、職業を紹介する番組であるという印象だ。仕事の内容を広く視聴者に知ってもらうことができるメリットがあるとはいえ、タレントを受け入れる企業はさぞかし大変だろうと思う。
幅広い視聴者の興味を引き付けるために、演出としてスタジオのトークをはさんでいるが、バラエティ番組のようで、少々うるさく感じた。

○ 1週間という短い期間で初めての仕事を成功させるのは難しい。うまくいくようタレントを手助けするのではなく、失敗の場合も含めてありのままの様子を伝えることが大切だと思う。そうすれば、たとえ憧れの仕事であったとしても、現実には大変だということが伝わるのではないか。

○ 自分の子どもと一緒に番組を見たところ、「仕事っておもしろい」と言って、食い入るように見ていた。子どもに仕事の楽しさややりがいを教えることは非常に大切なことである。また、親にとっても、自分の経験と重ね合わせながら、そばで子どもの反応に対してどのように接すればよいのかを学ばせてくれる番組である。

タレントは自分をさらけ出して仕事に挑んでおり、その人柄をうかがい知ることができた。

番組全体はタレントが仕事に本気で挑むという張り詰めた雰囲気だが、スタジオトークの部分は心地よい、リラックスできる演出になっている。

実際に仕事に挑戦したことによって、タレントが学んだことを最後にまとめて紹介していると、これから仕事を選ぼうとしている若者に仕事選びの参考になると思う。

「仕事ハッケン伝」では、取り上げた企業の名前などが映像に映るが、特定の企業のPRにつながるのではないかと気になった。

(NHK側)

企業を紹介するのではなく、仕事の肝となる部分を紹介するという視点で取材している。どれだけ注意しても、会社のロゴなどが映ってしまうことがあるが、企業名はコメントしたりしないようにしている。

○ タレントが挑戦する仕事は、タレントへのアンケートから選ぶのか。

(NHK側)

タレントへのアンケートから選ぶ場合もあるが、企業への取材や、番組を特に見てほしい若い世代がどのような仕事に興味があるのかというアンケートなどをもとに決めている。業種が偏らない配慮もしている。

○ タレントがわずか1週間仕事をしたくらいでは何も成し遂げることはできないだろうという先入観を持っていたが、本気で挑んでいる様子からは仕事の肝となる部分が伝わってきた。仕事に挑んだ大島麻衣さんにも非常に好感が持てた。

- 一つの仕事を取り上げる番組としては、3月まで放送していた「あしたをつかめ～平成若者仕事図鑑～」と同じような印象を受けた。

最近の社会は仕事に対する考え方が変わってきており、仕事を選ぶことへの意識が強くなっているように感じるが、仕事の肝となる部分や大変だけれど楽しそうということが番組から伝わり、仕事を選ぶ助けになればよいと思った。

スタジオのトークは、少し落ち着きがないような印象もあるが、番組の盛り上げに一役買っていたと思う。

- 内容的にはあまり印象に残るものがなく、仕事そのものを紹介する番組としては内容が薄い気がした。しかし、この番組には、憧れの仕事への挑戦という、あり得たかもしれないもう一つの人生を通じて、タレントが自分自身を発見していくという一面があり、その点では興味深いと感じた。

また、夢に向かって進んでいる10代の若者にとっては、タレントと自分を重ね合わせて、憧れの仕事を疑似体験できる、インパクトがある番組といえるのではないか。

- 楽しく見る事ができた。若い世代の人たちは、能力が高いがあきらめてしまうのが早いと思うので、あきらめずに努力した人は必ず結果がついてくるといったメッセージが伝わる番組を目指してほしい。初めての仕事でうまくいかず、失敗したり、挫折したりして、能力がない、格好悪い自分を知る中でも、そのような状況から逃げずに向き合った人だけに、人との絆や成長が与えられるといったメッセージも伝えてほしい。

- 空港のグランドスタッフという仕事について知ることができ、制服のスカーフはそれぞれが自由な巻き方をしてよいということは新しい発見だった。

仕事に挑むタレントの姿を通して、若い人たちに、その仕事の具体的な内容や社会的意義を気付かせる有意義な番組だと思う。タレントの緊張した表情や涙も自然に受け入れることができた。

スタジオには現場でタレントと一緒に働いた人たちがいたので、仕事に挑戦したタレントとその人たちとのトークをもっと詳しく聞きたかった。

(NHK側)

タレントのふだんの表情を知っている友人をゲストに迎え、仕事に挑んでいるときとふだんとの表情などの違いについてのコメントを期待している。また、その仕事に興味がある人などもゲストに迎え、トークにさまざまなバリエーションを持たせることをねらいとしている。

○ 飛行機1便を送り出す責任者という大きな仕事を任されるにあたって不安になっているタレントに対して、先輩のトレーナーが自分とタレントを“母と子”や“自転車に乗る”ことに例えて励ますエピソードや、そのエピソードをその後のナレーションでもうまく使っていたことが印象的だった。このように印象に残るコメントが毎回あると、さらにインパクトがある番組になると思う。

○ 「仕事ハッケン伝」は去年のファーストシーズンの放送から見ている。今回視聴したセカンドシーズンの第1回も印象に残る回であり、仕事に挑戦したタレントの成長がうまく描かれていた。

たった1週間仕事をしただけで、新入社員でもすぐには任せてもらえないようなミッションに挑戦して、成功するはずがないという“虚”の部分と、仕事に挑んでいるタレントの真剣な表情や上司からの厳しい言葉から伝わってくる“実”とのバランスが取れていると思う。

仕事に興味があるから見る人や、挑戦するタレントに興味があるから見る人など、番組を見るきっかけは視聴者によって異なると思うが、仕事をするの大変さ、格好悪いと思われても本気で挑戦することの尊さなど、視聴者の印象に残るものがあればよいと思う。

番組エンディングのスタジオでの「これからは飛行機の出発直前ではなくて、早めにゲートに行こう」という何気ないコメントだが、仕事に対する尊敬の念が伝わる、すばらしいコメントであり、もっと大きく取り上げてほしかった。若い人たちは、仕事を選ぶ意識がある一方で、選べる仕事が少ないという環境に置かれている。お金を出せばサービスが提供されるのが当たり前という意識の中で、仕事に対する距離感が傲慢になりがちであるが、真剣に仕事に挑戦しているタレントの姿を通して、仕事の本質を伝えていた。

タレントが実際に仕事に挑戦したことによって学んだ、その仕事の秘けつや大切なことは何かというまとめと、取り上げた仕事についての収入の額や離職率などの具体的なデータなどの紹介という、2つの要素が加われば、さらによい番組になると思う。

(NHK側)

「仕事ハッケン伝」は去年、ファーストシーズンとして9回放送した。4月からはセカンドシーズンとして放送を開始したところであり、スタジオの演出については試行錯誤しており、非常に参考になった。仕事についてのデータやその仕事の極意などは盛り込んでみたいと思う。

決して成功だけを見せようとしているのではなく、失敗したとしてもありのままに見せるつもりで番組を制作している。

番組として成功するように誘導していないが、仕事に挑戦するタレントの皆さんが非常に器用で優秀なため、あまり失敗がないというのが現状である。

<放送番組一般について>

- 4月1日(日)のNHKスペシャル MEGAQUAKE II 巨大地震 第1回「いま日本の地下で何が起きているのか」では、東北大学の校舎の柱が崩れ落ちる映像や、金華山の神社の鳥居が倒れ、建物が壊れる映像などがCGで再現され紹介されていたが、本物の映像と見間違ふほどリアルな映像であった。誤解を招く恐れがあるので、注記はもっとわかりやすく表示してほしい。
- 4月22日(日)のNHKスペシャル 宇宙の渚 第1集「謎の閃光(せんこう) スプライト」(総合 後 9:00~9:58)では、国際宇宙ステーションから見た夜の地球の映像は非常に鮮明で美しいものであった。その映像には、地球に関する膨大な情報が含まれており、強いインパクトを受けた。国際宇宙ステーションと飛行機による上空と地上それぞれから“スプライト”という閃光を観測し、その本質に迫っていくという番組の作り方自体にも緊迫感のある、見応えのある科学番組だった。宇宙飛行士の古川聡さんの「地球は“電気の星”だと、しみじみ感じた」ということばが印象的であった。5月20日(日)の第2集「天空の女神 オーロラ」もオーロラの映像がすばらしく、第1集、第2集ともに地球を新しい切り口から見せるインパクトの大きな番組であった。宇宙から見た夜の地球の映像は、人間の活動そのものや、人間の活動が地球にどのような影響を与えるかという重要な情報だと思う。地球における人間とは何なのかを宇宙から見た夜の地球の映像を通して描いた番組を作ってほしい。
- 5月5日(土)のNHKスペシャル 震災を生きる子どもたち「21人の輪」(総合 後 9:30~10:43)と6日(日)「ガレキの町の小さな一歩」は、時間と手間をかけるだけではなく、余計な演出を入れず、映像の持つ説得力を前面に出した番組であり、インパクトが強かった。視聴者に見てもらうために番組がバラエティー番組的な演出をする傾向がある中で、この番組はドキュメンタリーとして非常に印象に残る番組だった。タレントの出演、解説者やコメンテーターの人選などは、NHKとして統一的な方針があるのか、または番組ごとに委ねられているのか。

(NHK側)

NHKスペシャル「震災を生きる子どもたち」は、取材対象が子どもであり、時間をかけてじっくりと取材した。「ガレキの町の小さな一歩」は、仙台局が制作した地域放送番組を基に、母親が津波で行方不明になってしまった少女を主人公に描き直したものである。次に向かって行こうという、子どもたちの前向きな気持ちを伝えることができたと思う。

タレント、解説者やコメンテーターの人選などは、基本的には番組ごとに判断している。ただし、平成21～23年度の経営計画では接触者率の向上を経営目標としていたため、タレントを出演させる傾向になりがちだったところもあった。今年度からの新しい経営計画では、接触者率だけではなく、番組の質を多面的に評価や管理していこうと考えており、これについてはNHKとしての統一した方針である。25年度の番組編成についてもこの方針を踏まえて議論していく。

- NHKスペシャル「震災を生きる子どもたち」に関連した協会からの発言にあったように、平成24～26年度の経営計画では、接触者率を追い求めるだけではなく、新たに放送を質的に評価する方法を考えているということであり、大変興味深かった。今後の報告を期待している。
- 5月12日(土)のNHKスペシャル「追跡！世界キティ旋風のナゾ」(総合 後9:00～10:13)は、日本で生まれたキャラクターの“ハローキティ”が世界の109の国と地域で受け入れられていることを取り上げており、非常に興味深く見る事ができた。ハローキティに関わるスタッフたちの生き生きと活動する姿を通して、さまざまな活動の根本は人間であり、どのように活躍するのか、そういった場をどのように与えるのが大事である、企業に一番大切なのは“人材”であるというメッセージが明確に伝わってきた。日本が世界とどう関わっていくべきかのありようが深く分析されているとともに、人間が作り上げた架空の存在であるキャラクターが世界に与えるインパクトの大きさや影響もよく理解できた。ただ、キャラクターを発展させていった過程はわかりやすく紹介されていたが、そもそも誰がもとのキャラクターを作ったのかという原点の部分についての情報がなく、やや消化不良に感じた
- NHKスペシャル「追跡！世界キティ旋風のナゾ」は、日本のブランド価値を高めていくためには、世界とどのように付き合っていけばよいのかに、さまざまな具体例から迫っていた。大変興味深く番組を見たが、日本のブランディングにとって何

が重要なのかという問題に対する答えは非常に難しく、ヒントはあったが、その本質までは描き切れていなかったのではないかと感じた。

- 4月30日(月)の双方向解説 「そこが知りたい!」 「どうなる消費税・一体改革の行方は」(総合 前 10:05~11:54)は、解説委員が税と社会保障の一体改革をどう進めるべきかを総合的に議論する番組として、画期的であり、大いに評価できる。しかし、内容が欲張り過ぎだったために、論点が深まったとは言い切れず、やや言いつ放しで終わったように感じられた。少子高齢化のため、社会保障は労働者3人で1人の高齢者を支える“騎馬戦型”から、労働者1人で1人の高齢者を支えなければならない“肩車型”に変わることが前提とされていたが、労働力人口と非労働力人口の割合は変わっておらず、こうした前提でよいかどうかについても検証が必要である。さらに、例えば社会保障については確定拠出型年金が主流であるために、急に仕組みを変えることができないといった事情なども丁寧に説明したうえで、議論する必要があったのではないかと感じた。

(NHK側)

「双方向解説 「そこが知りたい!」」は2か月ごとに年6回放送しており、その時に最も社会的に問題になっているテーマを取り上げている。

今回は税と社会保障の一体改革についてさまざまな切り口から議論したが、多くの重要な問題を含んでおり、一つ一つの議論は十分に深めることができなかった。今後も継続的に議論し、国民的議論のきっかけとなるようにしたい。

労働力人口と非労働力人口の割合は変わらないというが、20歳未満と65歳以上にあたる非労働力人口は、将来は65歳以上の人口が20歳未満の人口を大きく上回ると言われている。年金、介護、医療など、社会保障に関する費用の多くは65歳以上に給付が偏っており、20歳から64歳の労働力人口がその費用を支えなければならないため、労働力人口と非労働力人口の割合が変わらないから負担も増えないというのは当てはまらない。世代間の公平感や格差の問題は放置できない。社会保障制度をどう構築して、改善していくかは大きな問題である。今後もできるだけわかりやすく、議論が深まるように取り組んでいきたい。

- 「双方向解説 「そこが知りたい!」」は注目している番組である。視聴者は、結論

を出すことを求めているのではなく、さまざまな情報や考え方を知りたいと思って見ているのだと思う。年配と若い解説委員個々の考え方の違いが明確に出ており、非常によいディベートになっている。

- 「サラメシ」は、働く人たちの昼ごはんをテンポよく紹介しており、毎週楽しみで見ている。時間の制約があり難しいかもしれないが、例えば弁当を紹介する場合、作ってくれた人のことや、農家や漁師など食材の生産者のことなど、もう少し、弁当の中味の一つ一つについて掘り下げて紹介してほしい。また、“あの人が愛した昼メシ”という亡くなった有名人が愛した昼ごはんを紹介するコーナーは、ゆったりとしたテンポの中で、故人がそのごはんを愛した理由がよく伝わり、番組の締めくくりにふさわしいコーナーである。
- 5月13日(日)に広島県福山市で発生したホテル火災を扱ったニュースを見た。そのホテルは昭和62年以降、建築基準法の違反で計5回の指摘を福山市から受けていたにもかかわらず改善されていなかったということであり、ひどいホテルだという印象を受けた。また、そのホテルはいわゆるラブホテルであるが、NHKのニュースでは“ラブホテル”という表現は使わず、“ホテル”と表現していたことが気になった。

(NHK側)

福山市の火災にあったホテルは、営業上は旅館業法のホテルと風俗営業法のラブホテルの両方の届け出を行っていた。実態はラブホテルとしての営業が主だったが、一般的なホテルとしても利用されていたことや、火災で死傷した被害者のプライバシーを考慮して、“ホテル”という表現にした。

- 就職活動に失敗したことを苦に自殺する若者が急増しているという報道をインターネット上などで目にすることが多い。昨年は150人の大学生などが就職活動の悩みで自殺しており、2007年の2.5倍に増えているということだった。新卒一括採用や就職活動に失敗すると正社員になることが非常に厳しいといった、雇用システムの構造的な問題が原因であるとも思われ、NHKはこういった問題を取材や分析してほしい。

単に心が弱いからうつ病になってしまったというのではなく、新卒一括採用で就職することができないと正社員になることが難しいという社会的な構造の問題が背景にあることを念頭に置いて報道してほしい。

(NHK側)

就職活動に失敗したことを苦に自殺する若者が急増しているというニュースは放送でも取り上げており、企業の募集が少ないために大学を卒業したがなかなか内定が取れないなど、就職活動全般についての問題も取り上げている。一方で、中小企業は積極的に雇用を募集し、政府やさまざまな機関も中小企業の募集を後押ししていることもあって、中小企業への大卒者の就職が増えたことによって若干就職率が上がったというニュースも伝えた。自殺だけでなく、就職活動がうまくいかないために、うつ病になる人が多いという問題もある。

6月2日(土)に放送予定のNHKスペシャル シリーズ日本新生「“雇用の劣化”を食い止める！」で、日本の雇用について根本から探っていく。

- 就職活動の問題は、司法試験の合格者の就職率が下がったり、教員も自治体の財政状況悪化で定員が減るなど、構造的な問題を抱えている。一方で、海外との比較でいうと、日本は、財政赤字はふくらんでいるもののヨーロッパなどに比べて若年失業率は低いという状況もある。雇用の問題は、国による制度の違いなどもあるため、日本国内だけの問題として捉えるのではなく、多角的な視点から考えてほしい。

(NHK側)

失業に関しては、2006年と2007年に“ワーキングプア”の問題を取り上げた。

イギリスやフランスでは、非常に高い若年失業率が暴動などの社会不安につながっている。アメリカも同様に若年失業率が高く、成熟した市場経済の国で大きな問題になっている。

日本でも、大企業がコストを抑えるために合理化を行う中で新卒の採用も抑えており、政府も企業の合理化を推奨している。個々の企業や組織としては正しい選択かもしれないが、日本社会全体として見ると、若い世代にしわ寄せが行き、雇用の機会を奪うという矛盾が起こってしまっている。このような視点を忘れずに番組を放送していきたい。

- 福井県の関西電力大飯原子力発電所の運転再開は、関西地方の電力供給の問題だけではなく、日本全体がこれからのエネルギーをどうしていくのかという問題である。感情的になったり、あおったりするのではなく、しっかりとしたデータに基づ

いて、原発運転再開のメリットとデメリットをきちんと整理して、運転再開の賛成派と反対派が冷静に議論する番組を放送してほしい。

(NHK側)

「シリーズ日本新生」では以前、日本のエネルギー問題について取り上げ、原発停止について議論した。原発の運転再開については、エネルギー問題の観点からこれからも取り上げていく。

(NHK側)

今後の原発に関する大きなテーマは、運転再開についてである。5月27日(日)の「日曜討論」でも与野党の政策責任者が原発再稼働について議論する予定である。原発の安全性、夏の電力不足などを日本全体のこれからのエネルギーをどうしていくのかという視点で、さまざまな角度から検証していかなくてはならない。

- 東京電力福島第一原子力発電所は1号機から4号機まで廃止となったが、5号機と6号機は定期検査で停止中である。このほか、福島第二原子力発電所の4機は冷温停止中で、東北電力女川原子力発電所の3機も停止中である。廃止となった4機については、放射能による影響を含めて、ニュースや番組で多く取り上げられているが、揺れの大きかった地域にある、ほかの停止中の原発が本当に大丈夫かどうかについても、取材して、正確な情報を伝える必要があるのではないか。
- 原子力発電所の問題は、データに基づいて議論をするという視点、日本だけでなく世界共通の問題であるという視点が入ってくれば、より客観的な議論につながっていくのではないか。
- 4月27日(金)のBS1スペシャル 世界体感! UMIHIKO×YAMAH I KO「4月号 ギリシャ・経済危機の旅」(BS1後11:00~11:50)は、ギリシャを旅しながら、財政危機と市民の暮らしを交えて伝える情報番組だったが、スタジオのトークについては方向性があいまいで、わかりづらかった。
- 4月28日(土)(BSプレミアム 後4:30~6:00)の「イナサがまた吹く日~仙台市荒浜 風寄せる集落の一年~」は、東日本大震災で被災した、仙台市荒浜地区の漁師や農家などの家族を1年間にわたり、取材した番組であった。東日本大震災によ

る津波が人々の生活に与えた影響の大きさや、人間の力強さを実にうまく描き出した、大変レベルの高いドキュメンタリーであった。

- 5月5日(土)の「青い海と音楽と～第4回沖縄国際映画祭 ラフ&ピース ミュージックフェス～」(BSプレミアム 6日(日)前0:15～1:44)は、沖縄という美しい自然とすばらしい音楽をたっぷり時間をかけて紹介したすばらしい番組であった。
- 東京電力の社外取締役にNHKの経営委員長の就任が内定したという報道があった。放送に影響させないのは当然であり、現場も真摯な報道に取り組むと思うが、NHKの番組制作や報道に疑念を持たれてしまうのではないかと懸念がある。審議会としても、この件がNHKの放送に影響がないかどうか確認していかなければならないと思う。
- NHKの経営委員長が東京電力の社外取締役に就任することが内定したという報道があるが、報道に携わる組織の者が、原発問題で頻繁に報道されている企業の経営に関わるのは、NHKの番組制作や報道に対して視聴者に疑念を持たれるのではないかと感じる。

(NHK側)

経営委員長の判断については、NHK執行部からコメントすることは差し控えたい。NHKとしては、引き続き、放送法に基づいて、自主、自律の立場を堅持し、公平、公正、正確で迅速な報道に努めていくことに変わりはない。

- NHKの経営委員長が東京電力の社外取締役に就任することによって、番組制作や報道に影響があるかどうか、番組審議会としても関心を持って見ていきたい。

NHK編成局
番組審議会事務局

平成24年4月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

4月のNHK中央放送番組審議会は、16日(月)、NHK放送センターにおいて、13人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、ららら♪クラシック「ベルリン・フィルの榎本大進 登場！」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、5月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	青柳 正規（国立西洋美術館館長）
	潮田 道夫（毎日新聞社論説委員）
	大軒 由敬（朝日新聞社常勤顧問（論説担当））
	駒崎 弘樹（NPO法人フローレンス代表理事）
	紫 舟（書家）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（社団法人日本建築学会会長）

（主な発言）

くららら♪クラシック「ベルリン・フィルの榎本大進 登場！」

（Eテレ 4月1日(日)放送）について>

- 番組で取り上げたヴィヴァルディ作曲の「四季」は有名な曲なので、親しみを持って番組を見ることができたが、番組で紹介する曲が生まれた時代背景、作曲家の人物像や境遇、楽器についての基礎知識など、付加情報があれば、さらに楽しめるのではないかと思う。

- クラシック音楽の本場のヨーロッパでは、国民的な音楽祭が開催されたり、クラシック音楽を専門に放送するチャンネルがあったりする。日本でもクラシック音楽は身近なものになってきているので、国民全体で盛り上がるような仕掛けを考えてほしい。

また、クラシック音楽の番組は、主に衛星放送で放送しているが、年配の方はいまだに地上放送中心にテレビを見ていると思われるので、Eテレにも一定量のクラシック音楽番組は必要だと感じる。

- 司会の2人に好感が持てて、トーク番組としては楽しめる。ただ、曲はいくつかの楽章を“つまみ食い”的に紹介していて、そういう紹介のしかたも否定はしないが、曲を最初から最後まで聞くことによって得られる魅力を十分に堪能できるような内容にはなっていないと思う。

“ビギナー”から“通”までに満足いただくという趣旨の新しい番組とのことなので、クラシック音楽ファンの多様な要望にどのように応えていくのか、内容についての検証を続けてほしい。

(NHK側)

新番組の1回目ということで、さまざまな要素を盛り込みすぎて、総花的になってしまった。曲の解説や楽器の説明など、ご指摘の点についてはきっちり改善していきたい。また、“つまみ食い”的に曲を放送するだけではなく、長い一曲をまるまる放送するような回も設けたいと考えている。

さらに、ヨーロッパで制作されているクラシック音楽番組の中には非常に素晴らしいものも多いので、そうした番組は主に衛星放送で放送している。「ららら♪クラシック」で見どころを紹介し、衛星放送のクラシック音楽番組で全曲版を放送するというような形で、奥行きを持たせて、クラシック音楽の魅力を伝えていきたい。

- “ビギナー”に親しんでもらえるクラシック音楽番組を新設するという考え方はよいが、「N響アワー」を廃止するのではなく、並立させてほしかった。内容についても、“ビギナー”向けの番組として、多くの人に見てもらいたいのであれば、人気のある出演者のトークと音楽でつないでいけばよいというのではなく、かつてベンジャミン・ブリテンが「青少年のための管弦楽入門」を作曲したように、また、レナード・バーンスタインが音楽入門番組に力を入れたように、もっと情熱を持って取り組む必要がある。選曲についても、ヴィヴァルディの「四季」やショスタコー

ヴィッチの「交響曲第5番」などはポピュラーだが、紹介した曲の中には決して有名とは言えない曲もあり、“ビギナー”向けとは言えないものであった。トークもクラシック音楽の本質を語る内容になっていないと感じた。

- これまで、一人の音楽家を案内役にして、その人の個性を全面に出しながら構成していく音楽番組はあったが、このように親しみやすい2人の司会によるトーク形式のクラシック音楽番組もあってよいのではないかと感じた。

番組にとって、ゲストの人选は大変重要な要素だと考えるが、第1回のゲストにベルリン・フィルのコンサートマスターとして活躍している若い日本人の演奏家を呼んだことは非常によい人选であった。

- 非常に盛りだくさんの内容で、それぞれの曲は“つまみ食い”しているようにも感じられたが、榎本さんらの演奏がすばらしいため、クラシック音楽に詳しくない人が見ても飽きない内容になっていた。「“全曲版”はBSプレミアムで〇月〇日放送」という旨の字幕スーパーが出ていたように、Eテレと衛星放送のクラシック音楽番組の連動を図ろうという、NHKの意図がよく伝わってきた。

- 演奏はすばらしかったが、その音をさらによく聞かせるためのテレビならではの視覚的効果はあまり感じられなかった。榎本さんのスタジオでの演奏を紹介する部分でも、ピアノの表面にスタジオが映り込んでいたり、画面の中に司会者が映っていたりと、演奏に集中して曲の世界に入り込むことができず、残念だった。非常にすばらしい演奏だったので、テレビ番組としての視覚的効果の工夫もしてほしい。

- 長年放送してきた「N響アワー」がなくなることを惜しむ声は、いまだに大きいと推測される。

「ららら♪クラシック」は、4月22日に「N響スペシャル(1)巨匠たちとの名演の軌跡」、29日に「バレエの世界へようこそ!」を放送するとのことであるが、今後、さまざまなテーマや演出に取り組んでいくことで番組のスタイルが確立されていくと思う。この番組が定着し、クラシック音楽への需要が増えることで、また、クラシック音楽を取り上げる番組も増えていけばよいと思う。

(NHK側)

「ららら♪クラシック」は、オペラやバレエ、室内楽なども取り上げ、幅広いクラシック音楽ファンの期待に応えたいというねらいで始めた番組である。ご指摘を踏まえて、テーマの選び方や演出の工夫も続けていきたい。

今後のゲストは、NHK交響楽団で長く正指揮者を務めている外山雄三さん、日本を代表するバレエダンサーの首藤康之さん、ピアニストの小曾根真さんや声楽家の佐藤しのぶさん、木管楽器の演奏家のエマニュエル・パユさんやガストン・ルーラーさんなど、多彩で魅力的な方々を招く予定である。

- 「N響アワー」というファンが多い番組が終わる中での難しい環境でのスタートだったと思うが、第1回の「ベルリン・フィルの榎本大進 登場！」のゲストの榎本さんは、親しみやすい人間性がトークから伝わってきて、演奏も聴きごたえがあり、“一流のものをわかりやすく”という番組の趣旨を体現していたと思う。

魅力的なテーマの設定やゲストの人選、さらに、衛星放送との効果的な役割分担で、視聴者がクラシック音楽の番組に求める多様な要望に応じてほしい。

- NHKは、NHK交響楽団の活動とそれを放送で紹介することで、西洋音楽を日本人のバックボーンにしみこませてきたのではないかと思う。視聴者もそれを高く評価しているため、新しく始まった「ららら♪クラシック」は「N響アワー」に替わる番組ということにはならないのではないかと感じる。

ただ、「ららら♪クラシック」の第1回は、非常に興味深く見ることができた。クラシック音楽番組にトークという要素を加えることで番組が成立するのかと思っていたが、“ビギナー”向けとしてはトークが加わることによって親しみ生まれ、見やすい番組になっていた。“ビギナー”から“通”まで、という番組の趣旨であるが、どっちつかずにならないように気を配って、番組を制作してほしい。

(NHK側)

NHK交響楽団は、「ららら♪クラシック」では「N響スペシャル」として毎月一度は取り上げる予定であり、また、そのほかの回でも演奏を紹介することがある。

「N響アワー」は廃止したが、その番組を作っていた制作者が「ららら♪クラシック」を引き続き担当しており、NHK交響楽団の音楽も含めて、クラシック音楽への愛情を番組を通して表現していきたい。

<放送番組一般について>

- 4月1日(日)のNHKスペシャル MEGAQUAKE II 巨大地震「いまの日本の地下で何が起きているのか」は、よく取材されており、本質を捉えた番組だった。今回の番組でも使われていたが、プレートの沈み込みのメカニズムを表したCGやアニメーションは、プレートテクトニクスの説が登場して以来、基本的には変わっていない。この最初に考えたモデルが、どんどん精緻化されていって違うものであるように考えられていたが、結局は最初に考えたモデルと同じものであったというのが今の時点での結論であるが、このような学問上の流れや経緯についても放送で取り上げなければ、今回の地震が学問や研究の世界でどれほどの驚天動地の出来事だったかが伝わらないと思う。

- 4月2日(月)の「ニュースウオッチ9」では、日米関係について大越健介キャスターがアメリカ・ワシントンから中継で伝えていた。NHKが独自に入手したTPP（環太平洋パートナーシップ協定）に関する日本政府の内部文書には「米政府内に失望感が漂い始めている」とあり、アメリカでは“決められない”日本に対していらだちや困惑があると紹介していたが、日本がTPP交渉への参加を決断できないことを非難しているように受け取られかねない表現だった。TPP交渉に参加するかどうかの判断は出ておらず、バランスを欠いたコメントだったのではないかと感じた。TPP交渉への参加は賛否のある問題であり、慎重に報道してほしい。

(NHK側)

TPPを巡る問題はさまざまな意見があり、多角的な観点からの報道が必要であることは認識している。今後もそのような状況を十分に踏まえて、報道していきたい。

- 4月8日(日)のNHKアーカイブス「歴史に見る社会保障改革 “少子高齢化”をどう支えるか」(総合 後 1:05~2:58)では、社会保障改革についてどのように議論されてきたのかを40年前の貴重なアーカイブス映像で振り返っていた。改革がうまくいっていない現在にも通じる内容もあり、優れた番組であった。

「NHKアーカイブス」で取り上げるテーマは、どのように決めているのか。

(NHK側)

番組の内容は、「NHKアーカイブス」の制作担当者が提案する形で決めている。“シリーズ原子力”や今回取り上げた“税”といった時事的なテーマを取り上げることもある。また、視聴

者からの要望に応える形でテーマを決める場合もある。

- テレビは“同時性”が最大の特徴だが、過去の番組を“今日的”な視点で再発掘して放送することで、時間軸が加わり奥行きが出ている。

また、過去の番組を学術研究に役立てることも重要である。NHKは過去の番組を放送のみならず、広く一般に活用できる試みも行っているということで、こうした取り組みは今後も続けてほしい。

(NHK側)

ご指摘の施策は、「NHKアーカイブス 学術利用トライアル研究」と銘打ったもので、メディア研究を専門とする研究者からのNHKの過去の放送番組やニュースを学術研究で使いたいという働きかけをきっかけに、平成22年3月に開始したものである。現在は研究者が論文を執筆中であり、劇作家の寺山修司の分析や水俣病の研究など、興味深いテーマもある。すでに完成した論文もいくつかあり、NHKとしても放送につなげることができるかどうかを検討しているところである。貴重な放送資産をどのように利用するかをNHK内部だけではなく、外部の人たちと一緒に検討し、今後のメディアの発展に役立てていきたい。

- 「NEWS WEB 24」は、視聴者からのツイートを画面上で紹介するという取り組みが印象的な番組である。紹介されるツイートは番組を見た感想や意見などの“反応”であり、これによって議論が深まることはないが、ツイートの積み重ねによって、視聴者の“民意”が浮き出てくるのではないか。ツイッターを見ながら番組を見ている人は、番組では紹介されなかったツイッター上のもっと多くの反応を共有しているはずであり、このようなテレビの視聴スタイルは、若い世代に向けた番組を作る際に意識しなければならないと思う。
- 「バリバラ～障害者情報バラエティー～」は、タブー視されがちな障害者によるお笑いに挑戦しながら、障害がある人のアイデンティティーについて真剣に考えている番組である。障害がある人が自身の身体的な障害を題材にした笑いも紹介しているが、「気の毒である」や「差別している」というような感じは全くない。番組の制作者のバリアフリー社会の実現に向けた思いが伝わってくる。
- 「100分de名著」は、昔から知っているが読んだことがない“名著”のポイン

トをわかりやすく解説するというテーマが興味深い番組である。ただ、昨年度までは、スタジオでのゲストの講師とのやり取りが予定調和で終わってしまっている印象があり、名著の内容もあまり伝わってこなかったが、4月からは司会や演出などがリニューアルされたので期待したい。

「コロンビア白熱教室」で講義をしていたシーナ・アイエンガー教授のように、教える側の優秀な人材を取り上げた番組が増えている。このように、本当のプロフェッショナルと言えるような先生の授業を番組で見ることができたら、若い人たちもNHKをもっと見るようになるのではないかと感じる。

このほか、4月7日(土)からの「フローズン プラネット 最後の未踏の大自然」(BSプレミアム 後9:00~10:59)、3月26日(月)~28日(水)の「テクネ 映像の教室」(Eテレ (27~29日)前0:50~1:05)、「スーパープレゼンテーション」、仕事学のすすめ「宮本亜門 舞台流コミュニケーション術」、「ティーンズプロジェクトフレ☆フレ」、「バリバラ~障害者情報バラエティー~」、「東北発☆未来塾」はいずれもよい番組であった。

- 最近、NHKの番組も世代や性別ごとに視聴対象を分けた番組作りをしているように感じられるが、そうした考え方に疑問を感じる。

例えば、作家の司馬遼太郎の命日に合わせて開かれたシンポジウムを収録した、3月31日(土)のTVシンポジウム「3.11後の“この国のかたち”~第16回菜の花忌シンポジウム~」(Eテレ 後1:00~2:00)は、東日本大震災以降の日本がどのように変わり、これからどのように進んでいけばよいのかについての問題提起がされており、テレビで久々に大人の討論が聞けたと感じさせる番組であった。

一方、同日の新世代が解く!ニッポンのジレンマ「決められないニッポン~民主主義の限界?~」(Eテレ 後11:55~4月1日(日)前1:55)は、1970年以降に生まれた論客たちがスタジオで議論し、それぞれの意見を主張していたが、かみ合っていない印象を受けた。

また、「第2回オンバト+チャンピオン大会」(総合 後10:55~4月1日(日)前0:24)は、若手のお笑いタレントたちが自分たちで考えた“ネタ”を披露していたが、「日本の話芸」などで取り上げる落語や講談などの何度も聞いてみたいと思わせてくれる古典とは、同じ“笑い”でもまったく異なる内容であった。

3月11日(日)の東北発☆未来塾 キックオフ「夢を描くチカラ~コミュニティデザイナー 山崎亮~」(Eテレ 後8:00~9:00)は、東北の大学生たちが山崎さんに学び、10年後の東北をどのようにしたいかということについてプレゼンテーションするという番組だったが、プレゼンの内容を成熟させるには時間が足りなかったと思う。

個々の世代のニーズに合わせた番組作りを進める中で、“若者向け”の番組につ

いては“手軽で見やすい”ことが重視されているといった印象を受ける。世代や性別ごとに分けて考えるのではなく、それらを越えた番組の制作や編成を検討してほしい。

(NHK側)

指摘の点はまさにそのとおりであり、視聴者がいま見たいと思っている番組を届けることも重要だが、さらにその先を見すえて、「こういう番組が見たかった」と思ってもらえるような番組を届けていかなければならないと思う。その際に世代や性別ごとに区切って考えるのではなく、生活環境や家族構成などの環境も立体的に捉えて、検討していかなければならないと考えている。

- 新世代が解く！ニッポンのジレンマ「決められないニッポン～民主主義の限界？～」は、放送時間内では民主主義は限界なのか、日本の社会をどのようにしていけばよいかなどについての答えは出ていなかったが、答えを出すことが大切なのではなく、若い世代の人たちがこのような議論に参加したこと、また、参加してよいのだという空気を作ったことに大きな意義があると思う。

1月1日(日)に「新世代が解く！ニッポンのジレンマ～震災の年から希望の年へ～」を放送した後、ネット上で大きな反響を呼び、再放送もされている。若者たちに大きな反響を与えた番組だったと思う。

(NHK側)

この番組の1970年以降に生まれた論客たちによる議論は、若い世代が考え、求めているものの一歩先を示すことができたと考えている。

- 若い世代に番組を見てもらいたいという問題意識はわかるが、民放と同じような番組作りをしても若い世代がNHKを見してくれるわけではなく、一方で、今までNHKを見ていた年配の視聴者が離れていってしまうということにもつながりかねない。新しい視聴者獲得に向けた努力は必要であるが、今まで番組を見てくれていた視聴者も大切にしてほしい。
- 変化の激しい世の中で、価値観も速いスピードで変化しており、アイデンティティーの確認や継承がその速さについていけずに、結果として世代間のギャップが生まれてしまっている。そのギャップの中で、どちらに向けた番組を作ればよいの

か、あるいは、どちらかに向けた番組を作ることで、さらにギャップが広がってしまうのではないかという葛藤があると思う。

(NHK側)

メディアの変化のスピードも非常に速くなっており、NHKも公共放送の原点とは何かを考えながらも、そのスピードについていかななくてはならない。アイデンティティーや価値観、理念を共有することが非常に難しくなっているが、常にそのことに挑戦していかなければならない。

- 個性は、世代や性別で区切られるものではなく、個人個人にあるものである。真摯（しんし）によい番組を作り、発信していくことによって、世代を越えて受け入れられていくと思う。
- 特定の世代向けの番組を作ることの是非が議論になっていたが、“若い世代”と“ネット世代”を同じ対象として捉えるのは違うのではないかと思う。10代や20代の若い人たちの間にも、情報に接する環境や興味を引かれるものに個々の差があるため、年齢だけでなく、情報に接する環境の違いなども考慮することが必要である。
- 東京電力福島第一原子力発電所の事故発生からしばらくの間は、事故についての情報が精査されていない状況で、適切な報道や解説がされていたかをしっかり検証して、今後の報道に生かしてほしい。

(NHK側)

原発事故に関する報道に関しては、政府、電力会社ともに状況を正確に把握できていなかった事故発生初期の段階で、深刻な事態を的確に伝えることができたのかということについて、課題があると認識している。

事故についての情報が少ない段階では、把握できていることとできていないことを精査し、解説者に必要以上に評価や見解を求めることはせず、可能なかぎり複数の解説者の意見を紹介するなどの改善をしていきたい。

- 中国の四川大地震は2008年の発生から4年がたつが、被災者の人たちは3年の間に何もなかった土地に新しい街をつくって復興を遂げている。直接の参考になる

かどうかは別にして、中国での復興への歩み取材して、東日本大震災との違いも紹介してほしい。

- およそ10万人もの人がフォローしていた堀潤アナウンサーのツイッターのアカウントが、担当番組の「Bizスポ」が終わることに合わせて閉鎖された。

その後、“NHKアナウンサー”のアカウントを設け、その中で堀潤アナウンサーもつぶやくということが周知されたが、それぞれのアナウンサーの個性を出しづらくなってしまうのではないかと感じた。失言した際に組織としてどのように対応するのかといった課題はあるが、個人として積極的に発言することができるルール作りや組織文化を築いてほしい。ツイッターなど、インターネット上での交流が活発になれば、NHKが力を入れている若年層との回路作りにもつながるのではないか。

組織で管理することは必要なことであるが、今回の堀潤アナウンサーのツイッターは多くの方がフォローしていたので、「Bizスポ」としてのアカウントの役割は終わったが、フォローしていた人々とのつながりを維持していく手段は考えてほしかった。

(NHK側)

NHKには、107個のツイッターのアカウントがあるが、組織で管理するという方針のもと、内容を精査したうえで実施している。現時点では、組織として管理するという方針や運用のしかたを変えることは考えていない。

NHK編成局
番組審議会事務局